

平成27年度
学力向上アドバイザー派遣事業

学力向上実践事例集

-授業改善を目指して-

平成28年3月

栃木県教育委員会

はじめに

県教育委員会では、平成26年度からこれまでの取組を発展させた「とちぎっ子学力アッププロジェクト」を実施しています。本プロジェクトの目的は、全員参加方式による「とちぎっ子学習状況調査」を要として、小・中学校9年間の学びの連続性を重視した本県独自の学力向上システムを構築し、児童生徒一人一人の学力向上に資することとしており、市町教育委員会の協力を得ながら各種事業を展開しています。

その事業の一つである、学力向上アドバイザー派遣事業は、学習指導及び組織マネジメント等について豊富な知識と経験を有する学力向上アドバイザーを全公立小・中学校に派遣し、とちぎっ子学習状況調査等の効果的な活用や、学習指導における検証改善サイクルの構築・運用が促進されるよう各学校への支援を行うものです。平成27年度は、10名の学力向上アドバイザーを、県内公立小・中学校の約3分の1に当たる179校に派遣し、学力向上に向けた学校の主体的な取組への支援を行いました。

本資料は、学力向上アドバイザー派遣指定校で実践されている特色ある取組を広く県内に紹介することで、学校における学力向上に向けた取組の参考にしていただくことをねらいに作成しました。各学校の実情に応じて御活用ください。

最後に、本資料の作成に御協力いただいた学力向上アドバイザー派遣指定校及び関係市町教育委員会の皆様に深く感謝申し上げます。

平成28年3月

栃木県教育委員会事務局学校教育課長

宇梶 宏美

目 次

はじめに

I 資料の活用にあたって	p.1
II 実践事例	p.2
1 めあて・ねらい、振り返る活動	p.2
・事例1 [小学校] 学校全体で「めあて、振り返り」の捉え方を統一し、組織的、継続的に取り組んだ事例	
2 自分の考えを書く習慣	p.4
・事例2 [小学校] 学習展開の工夫と自力解決の思考過程が分かるノート指導の事例	
・事例3 [小学校] 子どもの主体的な学習を促すために、学校全体でノート指導の充実に取り組んだ事例	
・事例4 [小学校] 書くことを通して活用する力を育てる指導の工夫・充実に取り組んだ事例	
3 調査問題の活用	p.10
・事例5 [小学校] 調査問題を年間指導計画に位置付け、授業で活用した事例	
・事例6 [小学校] 校長のリーダーシップと組織的な校内体制のもと、評価問題づくりに取り組んだ事例	
4 授業研究会	p.14
・事例7 [小学校] 「学力向上改善プラン」の具現化に向けて授業改善に取り組んだ事例	
・事例8 [小学校] 教師のPDCAサイクルを回すために「学力向上改善プランに基づく授業研究」に取り組んだ事例	
・事例9 [中学校] 教員間の同僚性を基に、教科の壁を越えて授業研究会の活性化を実現した事例	
・事例10 [中学校] 学校全体で継続して、主体的に授業研究に取り組んだ事例	
III 資料	p.22
① とちぎの子どもの「確かな学力」向上のために 授業改善に向けた3つの視点	
② 平成27年度とちぎっ子学習状況調査 分析ツール	
③ 関連表、パワーアップシート	
④ 学力向上アドバイザーからのメッセージ	

I 資料の活用にあたって

1 作成の目的

学力向上アドバイザー派遣指定校において実践されている特色ある事例を紹介することで、各学校が学力向上の検証改善サイクルの確実な構築・運用に取り組む際に役立てていただくことをねらいとして、本事例集を作成しました。

2 資料の構成

- (1) p.2～p.21には、学力向上の検証改善サイクルを構築・運用するとともに、授業改善を図るための実践事例を掲載しました。
- (2) p.22～p.33には、県教育委員会が作成した資料や学力向上アドバイザーが学校を訪問した際に活用した資料を参考として掲載しました。

3 資料の活用例

- (1) 学力向上の検証改善サイクルの構築や円滑な運用を図るための参考資料とします。
- (2) 学力向上に関する諸計画及び資料を作成する際の参考資料とします。
- (3) 授業改善のための参考資料とします。
- (4) 校内研修などで、教師の指導力向上を図るための参考資料とします。

4 活用する際の留意点

- (1) 本資料では、検証改善サイクルの確実な構築・運用や授業改善を図るための取組を紹介していますので、学力向上改善プランの具現化のために、ぜひ参考にしてください。
- (2) 本資料に掲載されている事例は、当該学校の実態に即した取組です。自校への導入に当たっては、各学校の児童生徒の実態や家庭・地域の実情に応じて取組を見直したり、新たな指導内容を追加したりするなど、必要に応じ自校化を図ってください。
- (3) 児童生徒の学力向上を図るためには、学習の基盤となる学級を「学びに向かう集団」となるよう指導する必要があります。本資料とともに、県教育委員会が作成した指導資料「学業指導の充実に向けて」（平成24年3月）、県総合教育センターが作成した「学業指導の充実～子どもが意欲的に取り組む授業づくりを通して～」(平成26年3月)や「確かめよう学業指導」(平成27年3月)等を参考にしてください。
- (4) 本資料は、県教育委員会のホームページに掲載しています。学校及び関係機関においては、必要に応じてダウンロードして活用してください。

<http://www.pref.tochigi.lg.jp/m04/tochigikko.html>

また、本資料に掲載している資料を閲覧することができます。閲覧方法については、本資料と同梱された別紙資料「掲載資料の閲覧の仕方」で確認してください。

II 実践事例

1 めあて・ねらい、振り返る活動

事例1 [小学校] 学校全体で「めあて、振り返り」の捉え方を統一し、組織的、継続的に取り組んだ事例

■取組のポイント

- 学校として「めあて、振り返り」の捉え方を統一するために、学力向上担当者を中心にその明確化、具体化を図り、組織的、継続的な研修を行った。
- 全教員参加の研究授業や授業研究会と各学年の定期的な研修会を効果的に組み合わせることで、「めあて、振り返り」の質的向上を図った。

■学校の概要

本校は市の中心部にあり、特別支援学級6学級を含め30学級、児童数770名、教職員56名の大規模校である。児童の転出入は頻繁である。

本年度のとちぎっ子学習状況調査の結果は、ほとんどの教科で県平均を上回ったが、昨年度は、学年によって県平均との差が大きかった。

大規模校のため、これまで学習指導については、学年及び低・中・高学年ブロック単位での取組が多く、全学年で共通した、系統的な取組を推進することに課題が見られた。

■取組の内容

1 学力向上改善プランの重点化

これまでの学習指導体制における課題を踏まえて、学力向上改善プランの「組織的・重点的な取組」を実践するに当たり、それらの取組に軽重を付ける必要があると考えた。

そこで、教師の指導力の向上を中心として、「めあて、振り返り」に重点的に取り組むこととし、実践の強化を図った。

2 「めあて、振り返り」の明確化、具体化

(1) 全体研修会と校務運営委員会との関連

- ① 全体研修会の中では、全教員によるグループ協議(8グループ)を通して、課題や改善策について十分に話し合い、共通理解を図った。
- ② 校務運営委員会では、全体研修会で協議した具体策について、学校全体で取り組めるようにするにはどうすればよいかなど、実践の方向付けを検討し「共通行動事項(8月)」を作成した。

(2) 「共通行動事項(8月)」の評価

「共通行動事項(8月)」の実践1か月後に、全教員で評価した。めあての提示、振り返りの実施について、教員から次のような問題点が示された。

- ① 「目標」と「めあて」、「振り返り」と「評価」は同一のものとして捉えるのか。「振り返り」は学習内

容のまとめとして捉えるのか。

- ② 「めあて」は「目標」を達成させるために児童に求める「態度や姿、力」として捉えるのか。振り返りは「めあて」に沿って「態度や姿、力」の何を書かせるのか。

学習指導部では、これらの問題点を受けて直ちに統一見解を示すのではなく、各教員の継続した取組をさらに確認しながら、教員一人一人の当事者意識を高め、よりよい事例の収集に努めた。

共通行動事項(8月)

- (3) 第1回目の研究授業での提案、校内授業研究会での協議(全教員参加、10月14日実施) 各教員が「共通行動事項(8月)」に基づき授業実践を進める中で、意図的に研究授業で提案し授業研究会で提案事項について協議することで、学校全体で共通理解を深めた。



授業参観の様子

(4) 「めあて、振り返り」について共通理解

授業研究会の協議内容を踏まえ、「めあて、振り返り」について、校務運営委員会で検討し、「共通行動事項（10月）」としてまとめた。

「めあて」と「ふりかえり」 2015.10.16

1 めあて

- 教師側が持つねらい（目標）を、子ども側の視点に立って表現したものとします。
- 前回提案した「児童の目指す姿を具体的に」と考え方は変わりません。
- できるだけ具体的に、子どもたちが「何が」「どのように」、「どのくらいい」でできればよいのか分かるような示し方を工夫します。
- 「どのくらいい」については、ふりかえりの際に表示することで対応
- 授業や活動の内容が子どもたちにも分かるように示すことで、子どもたちが見通しをもって活動できることが大切です。

2 まとめ

- めあてに対するゴールと考えます。
- 前回提案した「本時で何を学んだか、教師と児童で整理する」と考え方は変わりません。
- 教師側のねらい（目標）から外れない範囲で、子どもたちが納得した言葉（考え方等）を活用できるとよいでしょう。

3 ふりかえり

- 子ども自身が、その授業において
 - 「本時のめあてを振り返り、めあてを達成できたかどうかを子ども自身が評価する活動」
 - 「本時において向上したことや学びの良さを振り返る活動」と考えます。
- 指導を受け、①を付け加えました。このことにより、「めあて→まとめ→ふりかえり」がリンクしやすくなると思います。
- ふりかえりの視点を与えます。(○は～、△は～、□は～等)
- ※前回の提案では「構面面でふりかえる」でしたが、これだけでは「めあて」とうまくリンクしないので、
 - 「**教科の価値**」（算数であれば、「速くできた」「簡単にできた」「今までの考え方を上手く活用できた」等）
 - 「**教科の内容**」（算数であれば、「～ができた」「～が分かった」等）等も加えていきます。
- 単元の中の主たる授業においては、ふりかえりを文章表現させましょう。
- 評価計画をよく見て、ふりかえり（適用問題等）で評価する時間も作りましょう。

共通行動事項（10月）

(5) 第2回目の研究授業の実施と授業研究会での検証(全教員参加、11月18日実施)

「めあて、振り返り」の捉え方について、研究授業で実践し、授業研究会でその妥当性について検証した。



○幕府をたおそうとする運動
 ・天皇中心の国家を作りたい。
 ・薩摩藩、長州藩の下級武士
 ↓
 ・徳川慶喜が政権を天皇に返した。
 武士による政治の終わり
 ③開国により世の中が大きく変わり武士による政治が終わった。
 ⑤④
 ・私は、このように幕府の力がなくなった大もとのきーかいはペリかなのかもしれないと思った。700年間の世の中が終わる、イテどういふ気持ちなんだらうかと思った。私自身この勉強をして貿易のこととか今までの日本とかを深く考えることができたので⑤です。1800
 1700年の武士の世でしたらね。ペリ-の乗船は、大355子-が1771年にね⑤④(B)

振り返りと教員のコメントの例

3 「めあて、振り返り」の質的向上を目指した実践研究の継続的な取組

- 週1回実施している学年研修会を活用して、各教員が「めあて、振り返り」に関する実践を報告し、その妥当性や実効性について協議した。
- 学力向上担当者を中心に、各学年研修会で協議した内容の中から、特に学校全体で改善を図っていくべき事項について、全教員にフィードバックすることで、「めあて、振り返り」の質的向上を目指した。

今週のめあて・まとめ・ふりかえり (6)年

平成27年12月3日(木) ※学年研修の日付を記入

設定しためあて めあてについて、落書きやふりかえりのように

教科 算数 本時の目標

めあて 調べる方法を考え説明する。

※学年で相談して設定しためあてを記入（学年研修の際に次週分を設定しておく。）

板書したまとめ

・記号におさげえおくとよい。
 ・表や図に表して調べるとよい。
 ・樹形図がわかりやすい。

※児童との活動の中でできたまとめを記入（複数可）

児童のふりかえり（文章表現させた場合）

・樹形図って便利だよ。(A)
 ・いろいろな記号が出てくるとやさしいので表の方がよい。

※よかったもの、気に入ったものを記入（複数可）

課題・悩み・その他

思考の授業のときは、文章の振り返りが効果的であつた

※お気づきの点がありましたら、記入して下さい。

学年研修終了後、学習指導主任の机上に（金）までに提出してください。
 全体をまとめて、各学年に（月）に配付しますので、参考にしてください。
 戻った原本は、学年の備りに閉じてください。

学年研修会の協議記録の例

まとめ

- ◆ 学力向上改善プランの「具体策」の中から、特に重点的な取組を絞り込むことで、大規模校における、学年や学年ブロックを越えた一貫性のある系統的な実践を行いやすくなります。
- ◆ 全体研修会と定期的な学年研修会の内容を関連付けて協議することで、組織的、継続的な取組が可能になります。
- ◆ 「ねらい、振り返り」の明確化、具体化を図ることで、見通しを立てることやグループ活動、そして学習活動の工夫改善にも目を向けるようになります。

II 実践事例

2 自分の考えを書く習慣

事例2 「小学校」学習展開の工夫と自力解決の思考過程が分かるノート指導の事例

■取組のポイント

- 児童が意欲的に学習に取り組み、思考力・判断力・表現力等を育成するため、学習の「見通し」（課題・解決の見通し）・「振り返り」を重視した学習展開の工夫に取り組んだ。
- ノート指導・学び合いマニュアル「〇〇小メソッド」を作成し、徹底して児童に活用させることを通して、書くことの習慣化を図るとともに、書いたことと説明・話し合いを関連付けた学習活動を工夫した。

■学校の概要

本校は、学校周辺に田園地帯が広がり、住宅地域は少なく、西側は山並みに囲まれた自然豊かな環境である。南には、歴史遺産や名勝があり、長い歴史と伝統に培われてきた地域である。また、児童数は少なく、100名に満たない小規模校である。

とちぎっ子学習状況調査の教科に関する調査の結果では、全ての教科で県平均を上回っているが、設問の中で理由を考えたり、自分の言葉で説明したり、現象等を推測して考えたりすることに課題が見られた。また、全国学力・学習状況調査の結果では、特に、主として「活用」に関する問題において、問われていることを捉えきれないことや、解決方法に見通しがもてないことなどの課題が明らかになった。そこで、自力解決の過程を表出するノート指導や互いに解決の根拠を明らかにした説明をさせたり、考えを振り返って、考えを深めたりする場面の設定が必要であると考えた。

■取組の内容

本校では、算数科を中心に、以下の方策を研究の視点として研究実践に取り組んだ。

（研究の視点）

- 視点1 児童が見通しをもって意欲的に取り組むことができるような学習展開の工夫
- 視点2 自力解決の思考過程が分かるノート指導と言語活動の工夫

1 児童が見通しをもって意欲的に取り組むことができるような学習展開の工夫

本校では、児童が意欲的に学習に取り組み、思考力・判断力・表現力等の育成を図るために、以下のような学習展開を基本として実践してきた。

1 課題の把握⇒2見通し⇒3自力解決⇒4学び合い⇒5振り返り（まとめ）

特に、課題の把握では「なぜ」「どうして」という疑問が児童自身から出てくるような課題の提示・発問の工夫を心掛けて実践してきた。視覚に訴えたり、具体物を提示したりして児童が具体的に理解し、自ら解決しようという意欲、関心を高める工夫をしてきた。

また、自力解決の活動の前に、課題の解決方法や結果を見通すことができる場面の設定を工夫した。その際、

これまでに学んだ考え方や方法（既習事項）を想起させ、それらを活用して解決させることを重視してきた。そのために、既習事項を振り返ることのできる掲示物を作成して提示するなどしてきた。

さらに、学習展開の中で重視してきたことは、「学習課題」と「まとめ」を意識した学習展開の構想・実践である。本時のねらいに即して「学習課題」を提示し、その課題に対して意識させながら「まとめ」をさせた。

2 自力解決の思考過程が分かるノート指導と言語活動の工夫

(1) ノート指導に重点的に取り組んだ理由

昨年度は、教室に掲示してある言語ツールを効果的に活用し学び合う姿勢を身に付けさせてきた。今年度は、さらに算数的活動を充実させるために、一人一人がノートで思考する時間を十分に確保したり、算数科の学び合いの進め方や話し合いのポイントを掲示したりして意見交換を活発に行わせてきた。特に、見通しをもって意欲的に取り組む授業を実現していくためにも、思考過程に即して書くことの習慣化を図るノート指導が重要である。

(2) 「〇〇小メソッド」（ノート指導・学び合いマニュアル）作成の考え方・手順

本校では校内研修を通して授業力の向上を図ってきたが、その学年その単元だけの一過性の研究となりがちで、学年間の研究の縦の繋がりが希薄であった。そこで、年間を通して児童が主体的に学ぶ姿勢を身に付け、算数科だけでなく他教科にも波及できるように、学力向上を図るマニュアルとして「〇〇小メソッド」を作成した。このマニュアルを全学年に取り入れることで、6年間を通して「学び方」を発展的に身

かしくなるためのさんすうノート 1・2年生

○ややく

- ・ひにち ○/○
- ・ページ P○
- ・もんだいのほんごう
- ・かだい ⊙
- ・かんがえたこと ⊕
- ・まとめ ⊕
- ・もんだいは でかこむ。
- ・まとめは でかこむ。

○じぶんのかんがえをかくときは

- ☆ ずをかいて、せつめいする。
- ☆ ことばでせつめいする。
- ☆ しきをかいて、せつめいする。

○ノートをつかうときにたいせつなこと

- ☆ じょうぎをつかって、せんをひく。
- ☆ もんだいのあいだは、1ぎょうあけてつかう。
- ☆ ワークシートはでいいいに、かきおずにはる。
- ☆ のーとはやぶらない、らくがきをしない。

〇〇小メソッド

に付けることや、学年が進級して（担任が変わって）も身に付けた学び方を生かして学んでいくことができるのではないかと考えた。このマニュアルを作成するために、「ノート指導・評価方法」（1・3・5年）、「授業展開・話し合いの仕方」（2・4・6年）の2つのプロジェクトチームに分かれ検討し完成させた。校内研究組織を奇数と偶数学年に分けたことは、検討する時に各ブロックの意見を取り入れ、発達の段階を考慮する上でも有効であった。

(3) ノートに書くことの習慣化を図るための指導

マニュアルを作成しても、全校の児童に定着させることは簡単なことではない。そこで、全教員が次のような点に留意して取り組んできた。

まず、授業中は、パウチで作成したマニュアルを机の上に置かせて、ノートに書く際の参考にさせた。また、いずれの学年でも、「板書」をノートとできるだけ同じレイアウトにし、記号や線を使い書き方の指導をした。更に、上手なノートは書画カメラ（実物投影機）で映して参考にさせるなど、ノートの書き方の指導を徹底した。

3 書くことと伝え合い・学び合いを関連付ける工夫

(1) ノートを活用して伝え合う活動

自力解決の後、自分の考えを確かめたり、更によりよい考えを見いだしたりするために、ペア学習やグループ学習を取り



入れている。その際、児童が、自分のノートを示しながら、友達に分かりやすく説明できるような場面を設定した。ホワイトボードに絵や図、式、言葉などを書いて説明させた。

(2) ノートを活用して発表させ、それを基に学び合いを図ること

全体的話し合いの場面では、児童の考えの可視化が学び合いのための重要なポイントの一つである。そこで、本校では、児童が



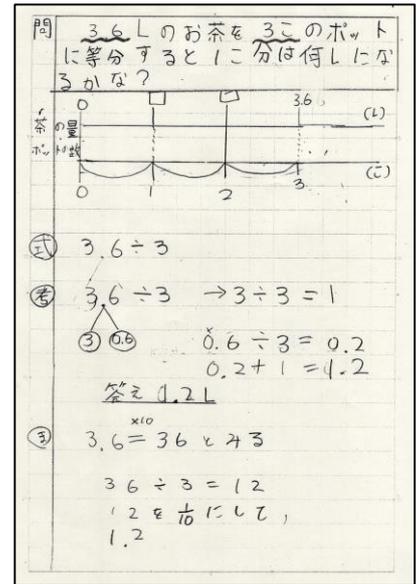
書いたノートを基に書画カメラ（実物投影機）で拡大して発表させた。このことにより、他の児童が発表内容をよく理解できるようになるとともに、発表児童も、より分かりやすく発表しようとする意識をもつことになり、発表力の向上につながった。

また、「〇〇小メソッド」を活用して、友達の考えと同じところ、似ているところ、違うところなどの視点をもって友達の発表を聞けるように指導した。

次に、話し合いの場面で出てきた多様な児童の考え方をできるだけ類型化し、必ず板書することにした。児童には、類型化された複数の考えを比べたり、それらの共通点や相違点を見いだしたり、よりよい考えを選んだりする場面の設定をした。多様な意見が出た後は、「はかせどん」の合言葉（はやく・かんたんに・せいかくに・どんなときでも使える）で意見を集約し、全員で「まとめ」の文を考えるように指導した。

4 実践を振り返って

ノートなどに書くことの習慣化を図る指導の一環として「ノート展示会」も行ってきた。こうした取組ももちろんであるが、何よりも日常的な指導の徹底が習慣化を図る原動力となっている。現在は、上学年では板書以外に自分の考えや友達の意見を進んで書く児童も出てきている。取組が進むにつ



児童のノート例

れて、算数科のノートだけではなく、他教科のノートや自主学習帳もレイアウトを工夫して、丁寧に書く児童が多く見られるようになった。ノートに書くことにより、自分の考えを明確にすることができ、意欲的に発表する児童が多くなってきた。

思考力・判断力・表現力等の育成には、ノートづくりは極めて重要な手立てであると考えている。

まとめ

- ◆ 児童に見通しをもたせ、意欲的に学習に取り組ませるためには、ノート指導は大変有効です。
- ◆ ノートの書き方・話し合いの仕方などを身に付けさせるためには、マニュアル等を作成し、校内で指導方法を共有していくことが重要です。
- ◆ 思考力・判断力・表現力等を育成するためには、ノートに考えを書く活動と「説明」「話し合い」の活動を関連付けることが大切です。

II 実践事例

2 自分の考えを書く習慣

事例3 「小学校」子どもの主体的な学習を促すために、学校全体でノート指導の充実に取り組んだ事例

■取組のポイント

- 思考の過程を明確にするために自分の考えをノートに書かせ、その考えを深めたり、広げたりする言語活動の充実を図った。
- 学力向上改善プランの具現化を図るために、学年ごとに取組状況を評価しプランの実効性を高めた。

■学校の概要

中山間地域の中心的な場所にある中規模の学校である。教科に関する調査の結果は、県の平均をやや下回る程度であるが、児童質問紙調査では、学年が上がるほど肯定的な回答が増えている。

校長のリーダーシップの下、全教職員が自分の役割を自覚し、学年を中心に学力向上に積極的に取り組んでいる。

■取組の内容

1 ノート指導の充実

(1) 自分の考えを書き、それを生かす場の重視

- ① 自分の考えをしっかりと表現させるために、授業のめあてを明確にした。例えば、算数科では、問題（課題）をしっかりと捉えさせるために、具体物を使うなど、提示の仕方を工夫している。
- ② 児童の実態として、自信をもって発表することに課題が見られることから、まず自分の考えをしっかりとノートに書かせている。その後、ペア学習やグループ学習を通して、自分の考えを友達に発表させ、自分の考えに自信をもたせている。
- ③ ペア学習やグループ学習後に、ホワイトボードや黒板に簡潔に自分の考えを書き、発表し、友達からの評価を得るなど、自分の考えをさらに深めたり、広げたりする練り合いの場を確保している。

(2) 自らのノートづくりと構造的な板書

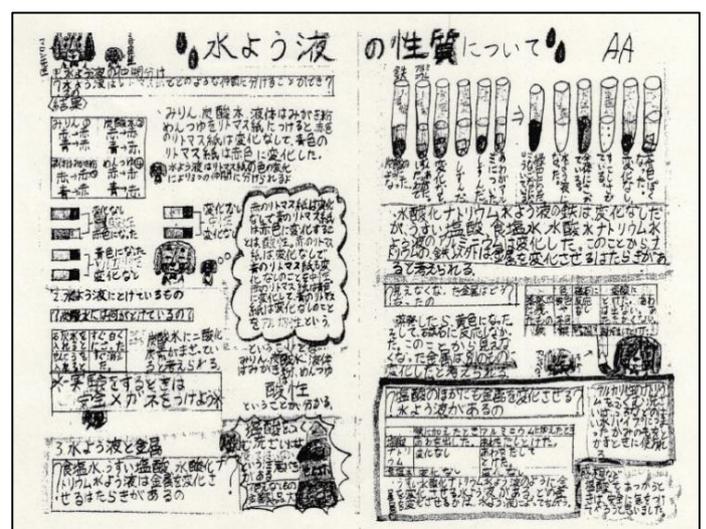
- ① 思考過程を明確にするために、自分の考えをしっかりとノートに書かせている。「ノートに写すから、自分のノートを創る」を合言葉に、学校全体で取り組んでいる。
- ② 思考過程が分かるノートづくりに取り組ませるためには、構造的な板書が重要である。板書計画についても、研究が進んでいる。



構造的な板書の例

(3) ノートの掲示

- ① 思考過程を分かりやすく示したノートを教室や廊下等に掲示している。児童は友達のノートを見ることで、自分のノートと比較したり、よいところを自分のノートに取り入れたりしている。
- ② 自主学習の手引きを充実させたり、保護者向けの学習指導だより（裏面に、自主学習ノートの例を掲載）を配布したりすることで、個に応じた自主学習ノートづくりにも意欲的に取り組ませている。



自主学習ノートの例

2 言語活動の充実

(1) 学習展開のパターン化



これらの各学習の段階で、自分の考えをしっかりと書く時間を確保している。また、教師の発問や指示等についても研究を深めている。

(2) ペア学習の重視

ペア学習の手引きを作成し、「これから、ペア学習を始めます。手引きに従い行います。」など型を重視した指導の徹底を図った。2か月後には、自然な形でペア学習が実践されるようになった。

ペア学習の手引き

教師用

3人のところは、2人を3人に変えて読みましょう。

「ペア学習を始めます。」(2人でいっしょにいきましょう。)

- ・ペアの方を向きましょう。
- ・ノートやプリントを2人の真ん中におきましょう。
- ・他の道具は、机のはしにおきましょう。

発表する人は……

「説明します。」

- 書いたところをさしながら、せつめいしましょう。
- えんぴつで書き加えながら説明しましょう。
- 図形などはコンパス・分度器などの道具を使いながら説明するとわかりやすい。
- 「算数のことば」を使いながら説明しましょう。

(説明が終わったら)

「どうですか。」

「もう少し説明してほしいところはありませんか。」

「考えでもここまでしかわかりませんでした。」

「どうしてもわかりませんでした。かわりに説明してください。」

聞く人は……

「はい。」

- うなずいたり、あいづちをうったりしながら書きましょう。
- 相手のノートやプリントを見ながら書きましょう。
- 自分の考えとくらべながら聞きましょう。
- 自分の考えの書き直しはしません。気づきは書き加えます。

ペアの人の考えを説明できるかな

(説明が終わったら)

「はい、わかりました。」

「わたしもおなじ考えです。」

「質問してもいいですか。」

「もっとこういったらいいと思います。」(アドバイス)

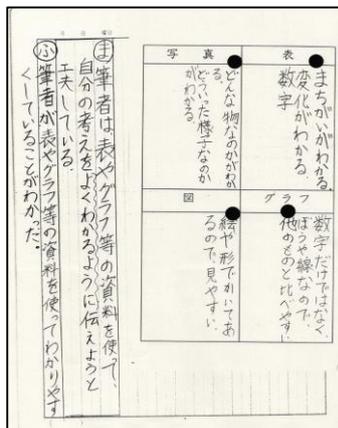
「ペア学習を終わります。」

姿勢を正して待ちましょう

(3) 授業の振り返り

「めあて」の提示とともに「振り返る活動」の実施にも取り組んでいる。

1時間の授業を振り返る際、児童自身の言葉で書かせるとともに、場合によっては教師がキーワードを示しながら1、2行程度の文を書かせている。



児童のノートの例

3 学年組織を生かした取組

(1) 調査問題の年間指導計画への位置付けと実践

年間指導計画の中で、「とちぎっ子学習状況調査」や「全国学力・学習状況調査」で明らかになった課題のある学習内容や単元に、「シール」や「練習問題」を貼り付けている。

(2) 月ごとの学力向上改善プランの実践の取組調査

学力向上を目指した改善プランの具現化を図るために、具体策の中から学年として何に取り組みかを月ごとに決め、取り組んだ内容を月末に学力向上担当者に報告する。担当者はそれらをまとめ、内容によっては全校体制での取組やより実効性のある新たな取組を提案している。

		学力向上改善プランへの取り組み実践内容		学習指導要領
		3月取り組む実践内容	1月の取り組み実践内容	
主体的な学習活動の展開	<ul style="list-style-type: none"> ○ノートづくりのよい例を学年ごとで紹介。 ○授業中の疑問の解消。 ○自分の考えをノートに書く習慣を身につけさせる。 ○自分の考えをノートに書く習慣を身につけさせる。 ○自分の考えをノートに書く習慣を身につけさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○1人1冊の整理。 ○授業中の疑問を、授業の終わりにまとめて質問。 ○自分の考えをノートに書く習慣を身につけさせる。 ○自分の考えをノートに書く習慣を身につけさせる。 ○自分の考えをノートに書く習慣を身につけさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○算数の知識を整理し、新しく学んだことを自分用に書き。 ○自分の考えをノートに書く習慣を身につけさせる。 ○自分の考えをノートに書く習慣を身につけさせる。 	
学習活動の展開	<ul style="list-style-type: none"> ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 	<ul style="list-style-type: none"> ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 	<ul style="list-style-type: none"> ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 	
主体的な学習活動の展開	<ul style="list-style-type: none"> ○ペア学習の導入(話し・聞く・書く)。 ○自分の考えをノートに書く習慣を身につけさせる。 ○自分の考えをノートに書く習慣を身につけさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ペア学習の導入(話し・聞く・書く)。 ○自分の考えをノートに書く習慣を身につけさせる。 ○自分の考えをノートに書く習慣を身につけさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ペア学習の導入(話し・聞く・書く)。 ○自分の考えをノートに書く習慣を身につけさせる。 ○自分の考えをノートに書く習慣を身につけさせる。 	
主体的な学習活動の展開	<ul style="list-style-type: none"> ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 	<ul style="list-style-type: none"> ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 	<ul style="list-style-type: none"> ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 	
主体的な学習活動の展開	<ul style="list-style-type: none"> ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 	<ul style="list-style-type: none"> ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 	<ul style="list-style-type: none"> ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 ○算数の学習のペースの継続。 	

月ごとの実践内容の例

まとめ

- ◆ 授業の中で意図的に書く場面を多く設定することで、児童に書くことの大切さを意識させるとともに、書く習慣を身に付けさせることができます。
- ◆ 自分の考えをノートに書かせることで、教師はその考えを授業の中で、どう深め、広げるべきかを考えるようになり、授業改善を図ることができます。
- ◆ 学年ごとの取組状況を評価し、その評価を改善に生かすことで、学力向上改善プランの実効性を高めることができます。

II 実践事例

2 自分の考えを書く習慣

事例4 [小学校] 書くことを通して活用する力を育てる指導の工夫・充実に取り組んだ事例

■取組のポイント

- 単元における習得型の授業から活用型の授業へと連動する授業づくりを構想する中で、活用型の授業において、基礎的・基本的な知識・技能を活用して自分の考えを書く活動を通して、思考力・判断力・表現力等の育成を図ろうとした。
- 算数科では、自分の考えを算数的な表現を用いて書くことを通して、説明する力を育てることに取り組み、国語科では、読み手に物語文の場面の様子や人物の気持ちが伝わるように表現を工夫させることを通して、想像して書く力を育てることに取り組んだ。

■学校の概要

市街地にある中規模校で、特別支援学級1学級を含めて13学級、児童数347名である。教職員数は、24名である。

本年度のとちぎっ子学習状況調査では、4年生は県平均を上回り、5年生は県平均と同程度である。各教科とも基礎・基本の問題は県平均と同程度であり、思考・判断・表現の問題は県平均を上回っている。

学力の向上を図るために、「めあて」から「振り返り」までの授業スタンダードを確立するとともに、学び合い活動を取り入れた授業改善を進めている。

■取組の内容

1 【算数科】算数的な表現を用いて書くことの指導

(1) 自分の考えを操作や図、式、言葉で表す

- ① 学年・単元名：1年「たしざん」
- ② 題材名：7 + 9の計算の仕方
- ③ 問題

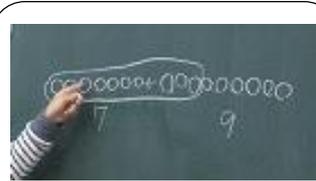
赤い花が7本咲いています。黄色い花が9本咲いています。合わせて何本咲いているのでしょうか。

④ めあて（課題）

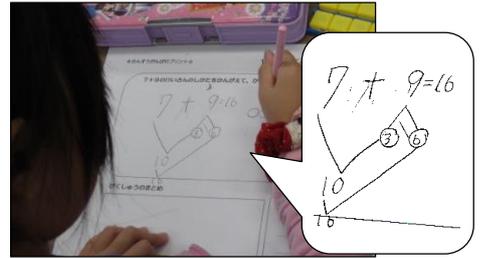
『7 + 9の計算の仕方を説明しよう。』

⑤ 実際の解決の様子

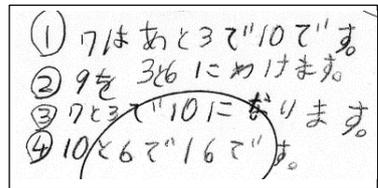
- ・ブロックを操作する
- ・アレイ図で表す



・式で表す



・言葉で表す



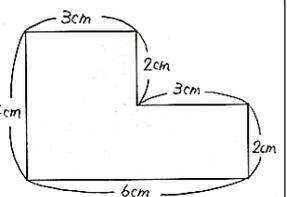
1年生から自分の考えを、操作、図、式、言葉で表せるように指導するとともに、それぞれの表現をつなげる（関連付ける）ことにより理解を深めさせることが大切である。



(2) 理由や根拠を示して、考えを明確にする

- ① 学年・単元名：4年「面積」
- ② 題材名：L字形の複合面積
- ③ 問題

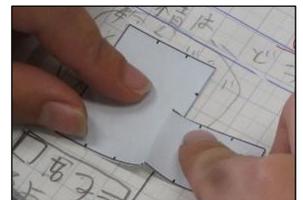
右の図の面積は何cm²でしょうか。



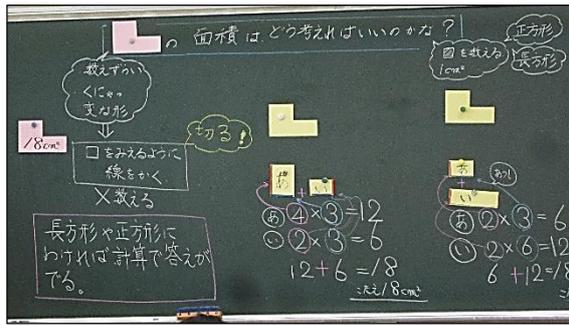
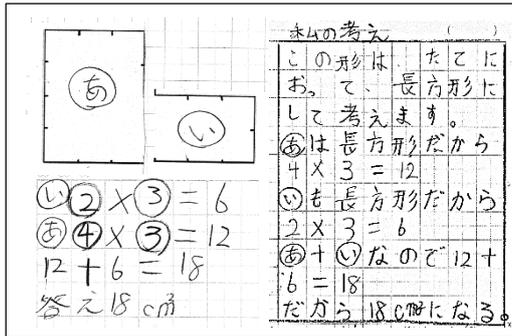
④ めあて（課題）

『L字形の面積を計算で求めよう。』

※操作活動を通して、求め方を考える活動

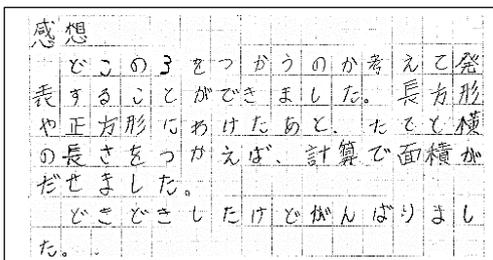


⑤ 児童の書いたノートより



活用型の授業では、数字や式の意味を確認したり、なぜその式になるのか理由を明らかにしたりすることにより、既習事項の確認・習熟を図る。

(3) 自分の言葉で「まとめ」や「振り返り」を書く

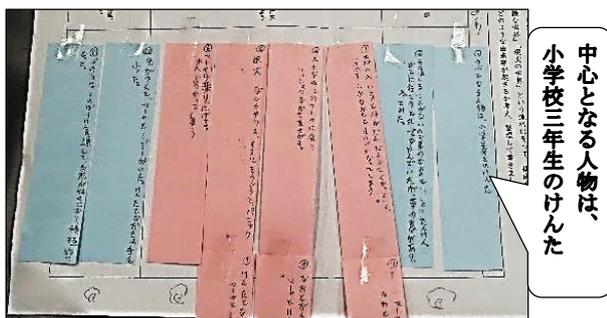


本時の学習内容について、分かったこと（できたこと）、よく分からなかったこと（できなかったこと）、次にやりたいこと（もっと知りたいこと）などを意識して、自分の言葉で書くことにより、本時の学びを構築したり、振り返って再構築したりすることが大切である。

2 【国語科】想像して書くことの指導

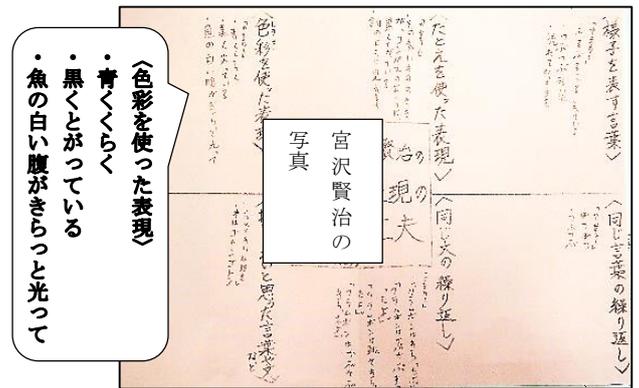
- ① 学年：5年「不思議な世界へ出かけよう」
- ② 題材名：宮沢賢治になって「不思議な世界」を書こう

(1) 物語の絵から、登場人物を設定し、想像した出来事や事件を考え、単語や一文で、構成メモを書く

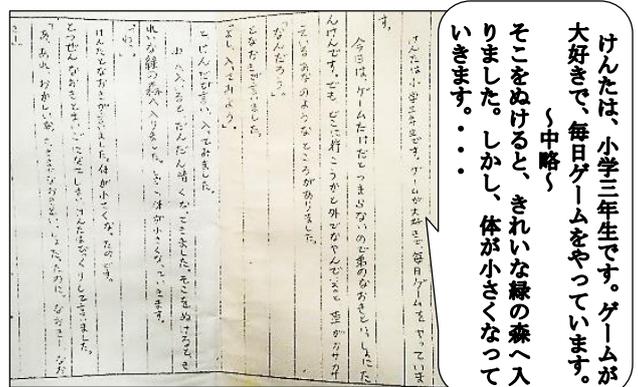


(2) 前単元で習得した「宮沢賢治の表現の工夫」を使って、構成メモを基に物語を書く

① 宮沢賢治の表現の工夫



② 児童が書いた物語の例



(3) 書いた物語を読み合い、宮沢賢治の表現の工夫を参考にして、相手の表現で工夫していることを伝え合う

(相互評価)



(4) 相手の表現の工夫について伝え合ったあと、代表の児童が書いた物語を全体の前で音読する

まとめ

- ◆ 頭の中で考えていることを、書いたり話したりしながら表出させることで、自分が何を考え、何を学んだのかを認識させることができ、子どもの確かな学びを育むことができます。
- ◆ 基礎・基本となる知識・技能を活用して問題解決をする際に、自分の考えを明確に書き表すことにより、学び合いを深め、活用する力を一層育むことができます。

II 実践事例

3 調査問題の活用

事例5 【小学校】調査問題を年間指導計画に位置付け、授業で活用した事例

■取組のポイント

- とちぎっ子学習状況調査問題（思考・判断・表現に関する問題）と全国学力・学習状況調査問題（主として「活用」に関する問題）を年間指導計画に位置付け、それらの問題を設問ごとにワークシートにして日々の授業で活用することで、児童の学習意欲を高めるとともに思考力・判断力・表現力等の育成を目指した。
- 担当者が中心となり、学校全体で組織的に調査問題の活用に取り組むことによって、同一歩調で学力向上対策に取り組もうとする教員の意識を高めた。

■学校の概要

中規模校で、学区の大半が田園地帯である。3世代同居の家庭が多く、保護者の多くは兼業農家である。家庭・地域とも教育に対する関心が高く、協力的である。また、学区内には文化会館や図書館等の施設があり、様々な教育が展開できる環境にある。児童は明るく穏やかで、スポーツ少年団への参加も多い。

■取組の内容

1 これまでの取組の成果と課題

(1) 昨年度までの取組の成果

平成27年度5年生に関して、とちぎっ子学習状況調査結果について県平均との差で比較すると、国語、算数、理科のすべてにおいて伸びが見られた。5年生の調査結果が向上した要因として、漢字テスト、計算力テスト、朝の読書などが挙げられる。その中でも、一番効果があったと思われるのは、日々の授業に「個人学習→ペア学習→全体学習」という学習の一連の流れを取り入れることで、少しずつそれらの定着が図られてきたことと、その結果として、活用の問題等を解決する学習活動において互いに学び合うことができるようになってきたことだと考えられる。

(2) 昨年度までの取組の課題

これまでの授業では、基礎・基本の学習を重視し、定着を図ってきたものの、活用の問題に関しては、どのような問題を提示すればよいか、どのように活用の問題を探したり、作成したりすればよいか、共通理解を図る機会がもてず、活用の問題を扱うことが十分ではなかったことが課題として挙げられる。

2 今年度と次年度以降の取組

- 全学年において、活用の問題をワークシート形式にして保管し、日々の授業の中で活用しやすくする。
- これまで培ってきたペア学習やグループ学習の中で、学習課題や評価問題として活用の問題に取り組ませることで、児童の学力向上を目指す。

(1) 今年度の取組

とちぎっ子学習状況調査問題（思考・判断・表現に関する問題）を3・4年の年間指導計画に、また、全国学力・学習状況調査問題（主として「活用」に関する問題）を5年の年間指導計画に位置付け、教師用指導書にチェックする。また、調査問題を設問ごとにワークシートにして、日々の授業の中で活用する。

(2) 次年度以降の取組

全学年で調査問題を授業で扱えるように、とちぎっ子学習状況調査や全国学力・学習状況調査の問題だけでなく、とちぎの子ども基礎・基本問題事例集〔活用編〕の問題を年間指導計画に同様に位置付けることで、日々の授業で活用していく。

3 各学年で年間指導計画に位置付ける調査問題

- 1・2年…とちぎの子ども基礎・基本〔活用編〕
- 3・4年…とちぎっ子学習状況調査（思・判・表）
全国学力・学習状況調査（活用）
とちぎの子ども基礎・基本〔活用編〕
- 5年…全国学力・学習状況調査（活用）
とちぎの子ども基礎・基本〔活用編〕
- 6年…とちぎの子ども基礎・基本〔活用編〕

4 取組の実際

(1) とちぎっ子学習状況調査問題と単元との関連

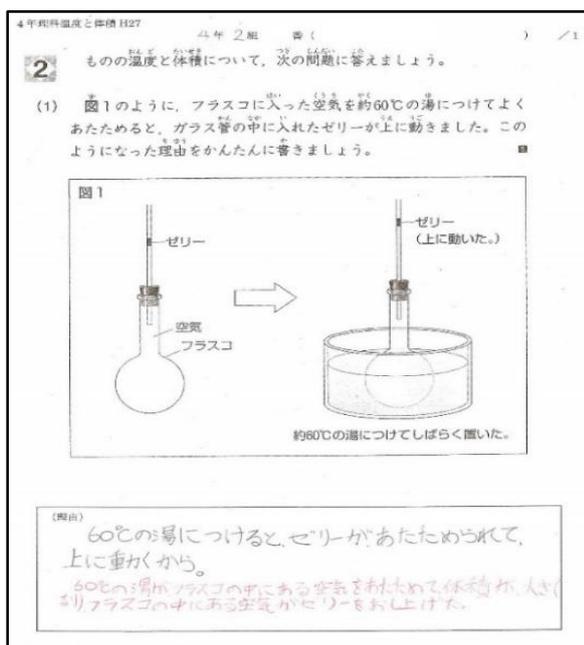
年度	国語		算数		理科	
	問題	4(他)年単元	問題	4(他)年単元	問題	4(他)年単元
26	ガスボンプ大倉で行う理由と共に書く	自分の考えを伝えるには	1乗数の条件が入った表を読み取り	整理の仕方	3(3)空気の温まり方の性質を説明する	4(他)年単元 ものの温まり方 P.140
	3(1)修飾語	修飾語	2(2)折れ線グラフの読み取りの読みを言葉や数を使って理由を説明する	折れ線グラフ	5(直列つなぎの導線のつなぎ方)	電気のほたらき P.33
	3(2)慣用句	慣用句			6(2)関節という言葉を使って骨中を曲げることが出来る理由を説明する	体の体とつくり P.88
	3(3)漢字辞典の引き方	漢字辞典の引き方				
27	7学級新聞でクラスや学校の管理を記事に書く	新聞記事を書く	1乗数の条件が入った表を読み取り	整理の仕方	2(1)温めた空気の性質を説明する	ものの温度と体積 P.112
	3(1)慣用句	慣用句	2(折れ線グラフの読み取りの読みを言葉や数を使って説明する)	折れ線グラフ	5(直列つなぎの導線のつなぎ方)	電気のほたらき P.33
	3(2)句読点	句読点			6(2)骨中が曲がる理由を「関節」という言葉を使って説明する	体の体とつくり P.88
	3(3)漢字辞典の引き方	漢字辞典の引き方			7(3)植物の生長と気温の関係を説明する	植物の成長 P.176
	3(4)こそあど言葉	こそあど言葉			9(2)密閉したビーカーの内側に氷滴がついた理由を説明する	水のがた P.164

調査問題と単元との関連

担当者が作成した上記の資料に、全教員が学年毎に分かれ、担当した教科の指導書のページ数を記入し、とちぎっ子学習状況調査問題と単元との整合性を確認した。複数の単元に関係する問題は、関連するページをすべて記入し関連が分かるようにした。

(2) ワークシートの作成

担当者が作成した資料に基づき、全教員で担当グループを構成し、とちぎっ子学習状況調査（思考・判断・表現に関する問題）を1題ずつ、問題と答えを記入できる欄を設けたワークシートを作成した。また、全国学力・学習状況調査（主として「活用」に関する問題）についても同様に作成した。



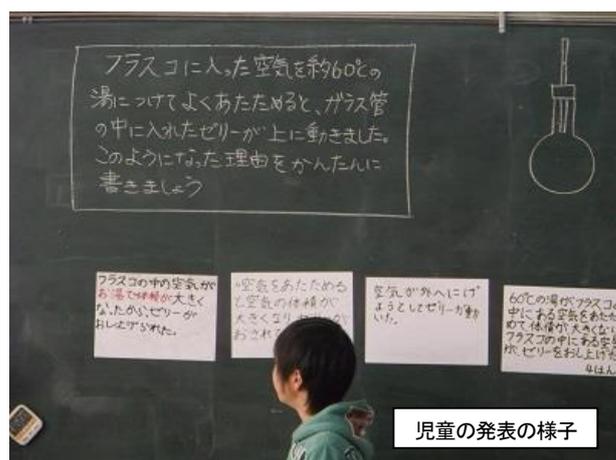
実際のワークシート

(3) 授業での活用の様子

4年生の理科の授業において、単元「ものの温度と体積」のまとめをした後、上記の平成27年度とちぎっ子学習状況調査の5年理科【大問2(1)】に「個人学習→グループ学習→全体学習」という流れで取り組ませた。



グループ学習の様子



児童の発表の様子

個人学習の段階で、7割の児童は自分の考えをもっていた。考えをもてなかった児童も、グループ学習を通して、友達の意見を聞くことにより自分の考えを書くことができるようになった。理解が十分ではなかった児童については、ゼリーが上に動いた理由を、教員がキーワードを使って再度丁寧に説明することで理解を促した。

(4) 実践を通して確認できたこと

- とちぎっ子学習状況調査問題（思考・判断・表現に関する問題）等を一つ下の学年の年間指導計画に位置付け、調査問題を設問ごとのワークシートにすることで、日々の授業の中で効果的に活用することができた。
- 調査問題を年間指導計画に位置付けたり、ワークシートを作成したりする活動を通して、授業における活用の問題の取り入れ方等について話し合う機会が増え、教員の同僚性を高めることができた。
- 多様な考えを出し合いながら解決を図ったり、自分の考えを言葉で書いたりするような活用の問題を学習課題として取り組ませる際は、グループ活動等を取り入れた授業を展開することが有効であった。

まとめ

- ◆ 授業改善を図るために、調査問題を学習課題や評価問題として活用することは有効であると考えられます。
- ◆ 担当者が中心となり、学校全体で組織的に調査問題等を年間指導計画に位置付け、調査問題毎のワークシートを作成することにより、該当学年だけでなく、全教員の意識の向上につながっています。

II 実践事例

3 調査問題の活用

事例6 「小学校」校長のリーダーシップと組織的な校内体制のもと、評価問題づくりに取り組んだ事例

■取組のポイント

- 学校課題でもある「小中の連続性を大切にし、授業力・指導力の向上を図る」ために、全校体制でとちぎっ子学習状況調査の分析や学力向上改善プランの作成に取り組んだ。
- 中学校での経験が豊富な校長のリーダーシップの下、問題作成の視点が指導力向上には有効であると考え、小規模校の特性を生かし、評価問題づくりに取り組んだ。

■学校の概要

学区には広大な田園が広がり、酪農家も点在する農村地帯に位置する小規模校である。

明るくまじめで素直な児童が多いが、自分の考えや思いを表現することや発表することなどに対しては、やや消極的である。学習にもまじめに取り組むが、自ら進んで学ぶ意欲の向上が課題である。

挨拶や身の回りの片付けなどの生活習慣は概ね良好であるが、宿題や復習などの家庭学習への取組については、やや課題が見られる。

■取組の内容

1 職員研修計画・内容

- (1) 10月5日(月)学力向上推進会議
 - ・方向性の検討
- (2) 10月28日(水)全体研修第1回〔第3回訪問〕
 - ・方針の確認、班編成、班別協議
- (3) 11月4日(水)全体研修第2回〔第4回訪問〕
 - ・問題作成(班別協議、全体での情報の共有)

2 とちぎっ子学習状況調査の分析(主な課題)

- (1) 国語(読むこと、書くこと、条件付き作文)
- (2) 算数(複合問題の読み取りと考え方の説明)
- (3) 質問紙(TVやゲームなどの生活習慣、学習習慣、家族との関係)



学力向上改善プランに向けた課題の絞込み



4年生：教科に関する調査の分析

3 全体研修第1回〔第3回学力向上アドバイザー訪問〕

(1) ねらい

本校児童の学力の実態ととちぎっ子学習状況調査の問題についての理解を深め、問題づくりの方向性について検討する。

(2) 内容

① とちぎっ子学習状況調査の結果分析

- 正答率を県平均との比較だけで見ると、学年によりばらつきがある。
- 正答率が県平均を下回らなかったものの、正答率そのものが低かった問題
 - ・国語：説明文・物語の読みの問題
 - ・算数：文章や場面を読み取り、考え方を説明する問題

※国語と算数の2教科に絞って作成する。

② 班別協議(作問の方向性を検討)

全体研修第1回協議資料

B 協議内容(協議事項) (議題別)			
議題	協議内容	協議結果	協議者
① 国語(説明文)	国語(説明文)の読みの問題	国語(説明文)の読みの問題	国語(説明文)の読みの問題
② 算数(文章や場面を読み取り、考え方を説明する問題)	算数(文章や場面を読み取り、考え方を説明する問題)	算数(文章や場面を読み取り、考え方を説明する問題)	算数(文章や場面を読み取り、考え方を説明する問題)

国語(説明文)

実施学年：5年
 実施時期：学期末
 内容：中学年の内容
 題材・単元：中学年の教材から
 その他、大問数、小問数、問題の趣旨等

③ 協議結果

※評価問題の作成(題材検討・決定)

- 国語(説明文) … 「ありの行列」より3問
- 国語(物語) … 「ごんぎつね」より3問
- 算数(量と測定) … 複合図形の面積・図に適した式を選ぶ問題式から面積の求め方を考え、説明する問題

4 全体研修第2回〔第4回学力向上アドバイザー訪問〕

(1) ねらい

評価問題づくりを通して、とちぎっ子学習状況調査問題について理解を深めるとともに、授業づくりに生かせるようにする。

(2) 内容

- ① 前回の研修の成果や本日の内容の確認
- ② 問題作成に当たっての留意点の確認
- ③ 問題、模範解答、採点基準の作成
- ④ 班ごとに協議結果を発表
- ⑤ 今後のスケジュール、見通しの確認

5 作成の意図と実際の問題

(1) 国語「説明文」5年『筆者の考えの進め方をとらえる』

① 作問の意図

- ・実際の調査問題にならない、書き出しと文末表現、字数など条件を制限した記述問題に取り組みせたい。
- ・与えられた問題に対する答えを、児童自身がキーワードを見つけ、的確にまとめられるような力をつけるための設問としたい。

※上記より、3年生の教材「ありの行列」を題材とし、複数の文の内容を的確に押さえて、自分の言葉でまとめる問題を設定した。

② 作成した問題「(3)条件を与えて記述させる問題」

国語 まとめテスト
答えは解答用紙に書きましょう。

〔1〕 次の文章を読んで、問題に答えましょう。
〔2〕 はだん落の番号を表します

〔1〕夏になると、鹿や公麩のすみなど、ありの行列を…

〔3〕 えさが多いほどにおいが強くなりますとありますが、それはなぜですか。次の、〔注意する点〕にしたがって、説明する文章を書きましょう。
〔注意する点〕

① 「えさが多いほど、」に続く形で書き始め、文の最後は「からです。」で終わるように書きましょう。
② 四十五字以内でまとめましょう。

(2) 算数「量と測定」4年『複合図形の面積』

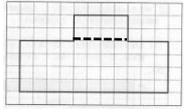
① 作問の意図

- ・L字型は、縦切り、横切り、全体から一部を引く、の3パターンで、やや難易度が低い。しかし、凸型にすると、より複雑に考えなければならない。凸型では、縦切り、横切り、全体から2カ所を引く、の3パターンが考えられるが、この場面では、縦切りはあまり望ましくない。「はやく、かんたんに、せいかくに」問題を解くには、どのように図形を分けて考えるとよいかを判断する力をつけるための設問としたい。本設問は、分け方によって、児童の理解度が分かると考えた。

② 作成した問題「凸型図形の面積」

すすむさんとひろみさんは、図のような図形の面積を求める方法を考えています。

(1) すすむさんは、図のように図形を2つの長方形に分けて考えました。



このとき、すすむさんがつくった式は、次の①から④のどの式でしょうか。1つ選んで書きましょう。

- ① $4 \times 4 + 6 \times 4 + 4 \times 3$
- ② $6 \times 11 - 2 \times 7$
- ③ $2 \times 4 + 4 \times 11$
- ④ $6 \times 11 + 2 \times 4$

(2) ひろみさんは次のような式で面積を求めました。
 $6 \times 11 - (2 \times 4 + 2 \times 3)$
どのように考えて式をつくったのでしょうか。図やことば、式を使ってせつめいしましょう。

6 調査問題の活用について

- (1) 単元終了時の評価問題と併せて実施
- (2) 学期末や学年末のまとめ学習で実施
- (3) 長期休業中の課題学習として実施
- (4) その他（朝や放課後の時間の活用）

7 本実践（評価問題づくり）後の教員の感想

- 記述の採点基準を話し合い、子どもたちの解答を予想したり、正答の範囲を考えたりした。その過程で、何度も本文に戻り、読み返したので、教材について深く研究することができた。
- 4択問題では、選択肢の並べ方に苦労した。順序立てて考えないと、正答にたどり着けないような並び順になるよう工夫した。
- 日頃から、授業でどんな力を身に付けさせたいかを考えることが大切である。
- 教材をよく読みきっかけとなった。どこを読み取らせたいか、今後意識して教材研究していきたい。
- 今後、作成した問題に取り組みさせて子どもの学力をどれだけ伸ばせるか等、検証していく必要がある。

まとめ

- ◆ 過去問題を参考にして実際に問題を作成することで、普段の授業でどのような力が求められているかを実感することができ、指導力の向上につながっていくと考えられます。
- ◆ 問題作成を研修に取り入れることで、指導と評価の一体化をより一層図ることができます。また、小中一貫教育の視点から、共同研究していくことが、小・中学校9年間を見通した児童生徒の学力向上においても、有効であると考えられます。

II 実践事例

4 授業研究会

事例7 「小学校」 「学力向上改善プラン」 の具現化に向けて授業改善に取り組んだ事例

■取組のポイント

- 教師の授業力（指導力）向上のために、「児童一人一人の学力向上を図る」ことを共通目的として、学年部会、ブロック部会、プレ授業、小授業研究会、全体研修会と段階を踏まえて授業研究に取り組んだ。
- 学校全体で取り組む「学力向上改善プラン」に基づき、教師一人一人が自分自身の取組内容を明確にし、学習指導案に「学力向上改善プランとの関連」や「授業参観の視点」を明記して授業に取り組んだ。

■学校の概要

町の市街地中心部に位置し、開校142年の歴史と伝統があり、町民にとってシンボリックな学校である。本校（児童数約300名、特別支援学級を含む15学級）は諸活動等において町内で常に中心的役割を果たしている。地域・保護者の教育に対する意識が高く、学校での取組を理解し家庭での学習習慣への協力が得られている。本年度のとちぎっ子学習状況調査では、4年生の理科、5年生の算数では、全体・領域ともに県平均を大きく上回っている。全体的にみても、5年生の国語の思考・判断・表現に関わる問題以外は、全て県平均を上回っている。

■取組の内容

1 教師の授業力（指導力）向上のために

(1) 分かる授業・主体的に学び合う授業の共通理解

指導案作成に当たり、学年部会、ブロック部会の検討会を設定し、学習課題設定の工夫、学習過程の工夫、学習形態の工夫、学習活動の工夫、指導技術の向上等について話し合い、同学年でのプレ授業を実践している。授業研究会での話し合いは同僚性が高く、焦点を絞った中味の濃い意見交換が行われている。ベテラン教師のノウハウやテクニック等、若手教師には刺激になり即実践できる貴重な研修会となっている。

(2) 「学力向上改善プラン」の活用の工夫

全教師による調査結果分析を踏まえ、「学力向上改善プラン」を作成し共通理解を図っている。

さらに、指導案への位置付けについては、全教師に分かりやすく、意識化を図るために、番号を付けるなどの工夫をしている。全教師の共通理解の下、教師一人一人が実践する上で、何をどのように行うのが明確になっている。

- 1 子どもの学ぶ意欲・学習習慣
 - (1) よさを認める言葉掛け・肯定的な評価
 - ①学習態度・授業への取組の様子を認める、褒める、励ます言葉掛け
 - ②ワークシートや提出物等に対する肯定的評価の記述
 - (2) 授業と家庭学習、及びめあての確認と振り返り活動の連携
 - ①めあての教師と児童の共有化
 - ②めあての理解・達成を確認する振り返り活動
 - ③めあてカード、問題カード、ふり返りカード、まとめカード等の活用と板書の工夫
 - ④板書とノートの関連を図った指導
 - ⑤単位時間の授業構想
 - ⑥授業と家庭学習のサイクル化（振り返り→家庭学習→めあての共有化→振り返り）
- 2 教師の指導力
 - (1) 校内研修の充実
 - ①調査結果・課題・改善策の全校体制での検討と実践
 - ②調査問題の活用
 - ③授業公開と授業研究会の促進
 - (2) 表現力の育成
 - ①書く活動の推進
 - ア 自分の考えや判断の根拠の記述
 - イ 分かったこと・考えたことを整理した記述
 - ウ 発表者の考えや意図を自分なりに解釈しての記述
 - ②話し合い活動の効果的実施
 - ③友達との話し合い活動を踏まえた自分の考えを深めたり広げたりする活動
 - ④「記述」と「説明・話し合い」を相互に関連付ける指導
- 3 その他



「学力向上改善プラン」全体構想図

本年度の学力向上改善プラン

(3) 「学力向上改善プラン」を意識した授業の実践

授業研究の際、指導案に「学力向上改善プランとの関連」を明記している。また、本時の授業の項では、「授業参観の視点」を明記し、授業を参観する際の視点を明確にしている。

(6) 展開		◎学力アッププロジェクトとの関連		○人権教育との配慮	
学習活動 (予備される児童の反応)	時間 (分)	形態	指導上の留意点 (生かしたい児童への支援を含む)	資料	評価 (評価方法)
1 前時までの学習を振り返る。 【児童の反応】 ・酸素 ・二酸化炭素 ・ちっ素	2	一斉	炭酸水には固体ではなく気体が溶けていること、その気体を何と予想したのかを確認する。	実験の写真	
2 本時のめあてを確認する。 【学習課題】 炭酸水には、何がとけているのだろうか。 【めあて】 実験器具を正しく使い、炭酸水にとけているものを調べよう。	2				
3 各グループで使用する実験器具を準備し、実験する。	20	一斉	実験器具の名称を覚えていないようなら、その名前を覚えてもらうようにする。 ◎全ての児童が実験結果から、再検討させ、考えを深めたり、広げたりして、新たに意見を記述させる。これにより、本時の目標を達成させるとともに、思考を深めたい。		【科学的な思考・表現】 (おむね満足できる状況)

4 実験結果を確認する。	5	一斉	どのような実験結果が出たのか、それを踏まえて、炭酸水に何がとけているのかを再検討させる。実験結果から、再検討させ、考えを深めたり、広げたりして、新たに意見を記述させる。これにより、本時の目標を達成させるとともに、思考を深めたい。	実験結果の表	
5 すべてのグループの実験結果を基に、考察する。 【児童の反応】 ・臭香が消えたこと、石灰水が白くにごったことから、炭酸水にとけている気体は二酸化炭素だということがわかる。					

学力向上改善プランとの関連と授業参観の視点が明記された指導案

(4) 学力向上改善プラン個人票の作成

全校体制として取り組む「学力向上改善プラン」の各項に、各校務分掌や担当学年、役割を意識しながら、教師一人一人の具体的な取組内容が記入された個人票を作成している。

毎日の授業実践での具体的な取組内容を作成することで、全校体制で取り組む「学力向上改善プラン」を毎時間の授業で意識的に実践することができる。

2 (2) 教師の指導力	課題	具体策	自分の取組の具体的な内容	実践しての感想や課題
校内外研修の充実	○年別教科別研修・児童質問紙調査確定率が学年により差がある。 ○学年別教科別研修について、学年は概ね一斉で行われ、4年は上回っている。 ○児童質問紙調査確定率について、4年は概ね多人数が参加しているが、4年は低。 ○学校質問紙調査(授業研究を含む校内研修)の取組が、3・4年間で概ね同程度であり、単全体と比較して、下位18.2%に位置している。	○調査結果を分析し、課題への改善策を検討し、全校体制での取組に取り組み。 ○全校体制で調査結果を分析して、問題の整理を整理する。問題を授業、実習学習等に活用する。 ○1人1枚の公開と4回の授業研究会を実施する。	○調査問題と学習指導要領(教科・領域・内容等)との関連を調べ、調査問題を授業や実習学習で活用できるように整理する。 ○5回の学力向上研究会、及び、プレ授業を含めて全学年の授業研究会を実施するための計画、準備をする。	実践しての感想や課題
表現力の育成	○児童質問紙調査の結果、「グループなどで話し合い自分から進んで参加している」の肯定率が5年単年平均41.5、4年41.1。「授業で自分の考えを発表する機会が与えられている」の肯定率が5年43.2、4年46.2。「授業中の友達の発言と自分の発言を比べてみる」の肯定率が5年47.2、4年41.1。「授業で自分の考えを発表する機会が与えられている」の肯定率が5年43.2、4年46.2。「授業中の友達の発言と自分の発言を比べてみる」の肯定率が5年47.2、4年41.1。「授業で自分の考えを発表する機会が与えられている」の肯定率が5年43.2、4年46.2。「授業中の友達の発言と自分の発言を比べてみる」の肯定率が5年47.2、4年41.1。	○書く活動を推進する。 ・自分の考えや判断の根拠を記述する。 ・分かったことや考えたことを整理して記述する。 ・発表した人の考えや意見を解釈させたものを記述させる。 ○「記述」と「説明・話し合い」を相互に関連付けられる指導を推進する。	○授業中、自分の考えを書き活動を意図的に位置付け、書くことに慣れさせる。 (ワークシートの工夫・キーワードや書き方や語彙を示すなど手立ての工夫) ○書いたことを活用して発表させたり、友達の発表を聞いて感想させたり自分の考えと比較させたり、発表の機会を意図的に設け、発表や話し合い活動に慣れさせる。 (関心と意欲の醸成)	

学力向上改善プラン個人票の例

2 授業研究の基本的な考え方と進め方

(1) 基本的な考え方

ブロック部会(低学年・中学年・高学年)を編成し、ブロック部会の教師全員が授業づくりの全段階(学習指導案作成・プレ授業及び研究授業・授業研究会)に関わる。

(2) 学習指導案の作成

① 学年部会

学習指導案形式に基づき、単元全体の指導と評価計画、「学力向上改善プラン」に関する授業参観の視点を含む指導案(授業者が作成した原案)を協議する。

② ブロック部会

当該学年が作成した原案を検討修正する。授業で使用する提示資料、教材教具、ワークシート、適用問題を共同で作成する。

「学力向上改善プラン」の手立てが、当該単元・単位時間において適切かどうか再検討する。

(3) プレ授業、小授業研究会の実施

ブロック部会で作成した指導案に基づいたプレ授業を実施する。校長・教頭・教務主任・学力向上担当者・ブロック所属教師が参観し、その後に授業研究会を行い、児童の姿から「学力向上改善プラン」の手立てを検証し、ねらいを達成するためのよりよい手立てを再検討する。

(4) 研究授業、授業研究会(全体)の実施

授業参観の視点を基に研究授業を参観し、児童の学びの姿を把握するとともに、手立ての有効性を検証する。

参観者は、視点ごとに効果的な点や改善点を付箋に記入し、ワークショップ型の授業研究会に臨む。

事前の準備を充実させることで、授業の意図や手立ての工夫についての質疑や説明を省略し、児童の学びの姿についての協議時間を確保している。

まとめ

- ◆ 学習指導案を授業者と学年部会、ブロック部会で作成することにより、「学力向上改善プラン」の手立てを中心に考えた単元の計画・単位時間の計画ができ、授業者だけでなく、学年、ブロックの教師の意識を高めることにつながります。
- ◆ ブロック部会での学習指導案作成・プレ授業・授業研究会・学習指導案の修正を行うことで、授業の意図や手立ての工夫についての質疑や説明を省略し、協議の時間を確保することができます。
- ◆ 授業の視点に基づいた授業参観や授業研究会での協議では、全教師が明確な視点の基に授業改善に向けた方策を検討し、各自の授業の改善に結び付けることができます。

II 実践事例

4 授業研究会

事例8 「小学校」教師のPDCAサイクルを回すために「学力向上改善プランに基づく授業研究」に取り組んだ事例

■取組のポイント

- 校長が学力向上への明確な方針を示し、全教員の授業を参観することを通して、授業改善の方策を提案するなどリーダーシップを発揮した。
- 学力向上改善プランにある「教師の指導力」から課題を設定し、月1回の授業研究を通して成果と課題を振り返り、翌月までに改善できるよう具体的な実践へとつなげた。

■学校の概要

市の西部に位置する大規模校である。学区は市街化が進み、転出入も多い。地域代表や関係団体の教育への関心は高く、子どもたちを地域で育てようという意識が高い。

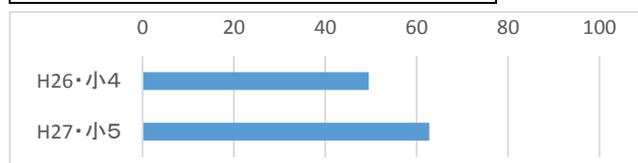
「〇〇小スタンダード」を踏まえ、一人一人のよさを認めながら、望ましい規範意識や学ぼうとする意欲を高め、基礎的・基本的な学習内容を確実に身に付けさせるための教育活動を行っている。

■取組の内容

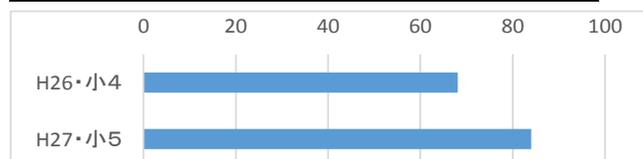
児童の学力向上を目指すためには、まず学校が組織としての機能を果たし、全教員が同一方向を向いて実践を進めなければならないことは、国や県の学習状況調査の結果からも明らかである。そのためには、校長が明確な目標（ビジョン）を示し、学力向上担当者を中心に組織的に取り組まなければならない。

本校では、校長のビジョンに基づき、昨年度から国語・算数における基礎学力の向上を目指すとともに、生活科・総合的な学習の時間での探究的な学習を通して、主体的に学ぶ意欲を育む実践的な研究を行っている。また、下のグラフに示す通り、とちぎっ子学習状況調査児童質問紙調査（平成26年度小学校4年生と平成27年度小学校5年生の同一集団による比較）の結果では、児童の学習方法や授業の様子に変化が見られる一方で、振り返る活動については課題があることが分かった。そこで、今年度は学校課題「自ら学ぶ子の育成～主体的に学ぶ力と基礎学力の向上～」を基に、昨年度の目標（ビジョン）を継続するとともに、調査結果から見られた新たな課題を設定し、その解決に向けて授業改善を中心に取り組んでいる。特に、ねらいの提示や振り返る活動の実践については、学力向上改善プランに位置付けるとともに、具体策を学年ごとに一覧表にまとめ、課題解決に向けて「学力向上改善プランに基づく授業研究」を行った。

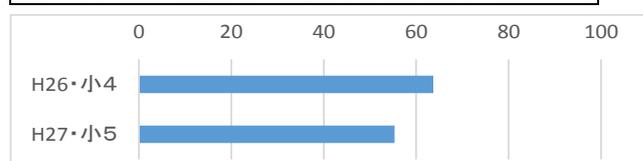
家で、テストでまちがえた問題について勉強している



授業では、クラスの友達との間で話し合う活動をよく行っている



授業では、最後に学習したことを振り返る活動をよく行っている



1 「学力向上改善プランに基づく授業研究」の目的

- (1) 学校全体で取り組む意識を持ち、取組の方向性や授業改善の視点を明らかにし、全教員が視点を共有しながら実践的研究を進める。
- (2) 国語・算数を授業研究で取り上げ、授業力の向上を図るとともに、各学年の学力向上改善プランを踏まえた授業実践を通して、基礎学力の向上を図る。
- (3) 「何を学ぶか」（ねらい）や「どのように学ばせるか」（中心となる学習活動）、児童の視点で「何が分かったか」「何ができるようになったか」（振り返り）について、全教員が月1回の授業研究を通して検証する。

2 具体的な取組

- (1) 校長が学力向上担当者の「思い」を聞き、実施に当たっての課題や実施の効果、評価等について話し合い、円滑な実施に向けての指導助言とサポートをする。
- (2) 授業者が、月1回学力向上改善プランに基づく指導案を作成し、提出する。
- (3) 校長・教頭・主幹教諭・学力向上担当者が各担任等の月1回の授業を参観する。
- (4) 授業当日、授業者は実践を振り返り、校長・教頭・主幹教諭が授業者に指導する。

授業の参観記録については、校長が指導事項を用紙にまとめ、授業者に伝える。

- (5) 授業者全員が、「学力向上改善プランに基づく授業研究」シート（資料1）を提出する。校長は、提出されたシートに授業者に応じた指導助言のコメント

トを記入し（資料2）、その授業実践の成果と課題を伝える。

学力向上改善プランに基づく授業研究		
6年組	担任名	教科『算数』
9月17日(木)	単元名	比例と反比例
	本時のねらい	伴って変わる2つの数量の関係について考察し、比例の関係について理解を深める
学力向上改善プランの取り組み		
<ul style="list-style-type: none"> 授業開始時に100問の四則計算を3分間行い、計算力の向上を図る。 ペア学習を取り入れ、「伴って変わる2つの数量の変わり方について」自分の考えを説明する。 		
成果	<ul style="list-style-type: none"> 毎回100問の四則計算を取り入れることで、計算に対する抵抗がなくなってきた。 ペアでお互いに説明し合うことで理解を深めることができ、自信を持って発表に取り組めた。 	<ul style="list-style-type: none"> 時間がなく五つの項目全てを指導できなかった。時間がないときここだけは押さえるという適切な判断が必要だと感じた。
10月14日(木)3校時	単元名	角柱と円柱の面積
	本時のねらい	三角柱の体積の求め方を考えよう (三角柱の体積も底面積×高さで求められ、説明できる)
学力向上改善プランの取り組み		
<ul style="list-style-type: none"> 授業開始時に100問の四則計算を3分間行い、計算力の向上を図る。 ペア学習を取り入れ、「三角柱の体積の求め方について」自分の考えを説明する。ここまでは確実にやる。 		
成果	<ul style="list-style-type: none"> 100問の四則計算を継続して取り組むことで、集中力が増すとともに、児童自らが計算力の向上を実感している。 時間配分に注意することで、ペア学習に十分な時間を充てることができ、押さえるべきところを指導できた。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちの考えを十分に生かすことができなかった。思考を促す補助発問や板書を工夫することが必要だと感じた。

資料1 「学力向上改善プランに基づく授業研究」シート

11月6日(木)		単元名	拡大図と縮図
本時のねらい		拡大図、縮図の意味、対応する辺の長さや角の大きさについて理解する。 (対応する辺の長さの比や角の大きさが等しいことに気づく。)	
学力向上改善プランの取り組み			
<p>めあて「大きさが違って見えても同じに見える形の特徴を調べよう。」</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業開始時に100問の四則計算を3分間行い、計算力の向上を図る。 ペア学習を取り入れ、「大きさが違って見えても同じに見える形の特徴」について自分の考えを説明する。 板書計画を練り、子どもたちの思考を促したり理解を深める板書を心がける。 振り返り <p>「形を覚えていない大きさを拡大図、小さくしたものを縮図といひ、すべての対応する辺の長さの比や角の大きさが等しいければ、大きさが違って見えても同じに見えることが分かった。」</p>			
成果	<ul style="list-style-type: none"> 100問の四則計算を継続して取り組むことで、集中力が増すとともに、児童自らが計算力の向上を実感している。 板書計画を練ることで、子どもが、次に何をすればいいか理解しながら、次の課題に取り組むことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> まとめの場面では「比」が出てきた際に、2倍・3倍となるで済ませるのではなく、例を出して丁寧に教えたことで、振り返りの時間が確保できなくなった。振り返りは必ず行うという意識を常に持ち、授業に取り組みたい。 	

水かきもあつた。板書を板書して、子どもたちがよく見られるようにした。拡大図と縮図の関係を板書して、子どもたちがよく見られるようにした。

資料2 第3回授業研究(11月)における校長のコメント

3 成果と課題

学校全体で視点を明確にして授業改善に取り組んできた。特に、月1回の「学力向上改善プランに基づく授業研究」は、日々の実践を検証する機会として、また、得られた課題を次回の授業実践のテーマとする等、毎回の実践をつなぐ役割として機能している。その結果、教員が学力向上改善プランに位置付けられた「ねらいの提示」や「振り返る活動」を意識する授業づくりをするようになってきている。

今後とも、調査結果から明らかになった課題を解決するために、学校全体の取組として各学年のプランの系統化を考えていくことで、継続的な取組にしていく必要がある。

○ 学力向上担当者の声

学力向上改善プランに対する共通理解と同一歩調での取組が課題だった。そこで、学年ごとにプランを具体的に考え、取り組んできた。月1回の授業は先生方にとって大変だったと思うが、授業改善や学年ごとのプランを意識して取り組んでいたように思う。「『継続は力なり』を実感できた」等の声が各学年から聞こえてきた。

○ 20代教員の声

学力向上改善プランでは、特に学年の具体策にあるミニテスト、10の合成・分解1分間テストに取り組みました。続けることで効果が見えました。私自身も、短い時間で授業の導入ができ、本時の中心となる活動に時間をかけることができました。また、学年の先生方からこれらの取組について助言を得ることができとても参考になりました。

○ 40代教員の声

学力向上改善プランに基づいて授業研究を進める中で、毎時間のめあてをよく考えて提示することを意識するようになりました。もちろんそれまでも、その時間のめあてを黒板に書くことはしていましたが、授業研究を2回、3回と回を重ねるごとに、本時のねらいの示し方や振り返りの書かせ方が学校全体で今まで以上に具体的になっていき、普段の授業に生きるようになりました。ねらいと振り返りの一体化というのが実感できるようになりました。音楽や体育、図工などの技能教科でも、その時間のめあてをはっきり提示するようになり、授業の進め方が自分の中で明確になってきました。

まとめ

- ◆ 学力向上に向けた具体的な実践を学校全体で推進するために、校長が学校の重要課題として捉え、全教員と一緒に取り組むことで、その成果や課題を共有・実感できるようになります。
- ◆ 校長が、授業改善の明確な方針を示すとともに、授業参観を通して、それぞれの教員に合った具体的な指導・助言を行うことで改善点を明確にすることができます。
- ◆ 定期的な授業研究で明らかになった成果や課題を記録し、その後の授業に生かすことで、より具体的に教師一人一人が指導力向上に向けたPDCAサイクルを回すことができます。

II 実践事例

4 授業研究会

事例9 [中学校] 教員間の同僚性を基に、教科の壁を越えて授業研究会の活性化を実現した事例

■取組のポイント

- 学力向上に向けた授業研究会を通して、より一層教員間のコミュニケーションの充実を図った。
- 小中連携・中中連携の実践を通して、授業改善・教師力の向上に努めた。
- 教員間の同僚性を基に、教科の壁を越えて研究授業・授業研究会の活性化を図った。

■学校の概要

歴史と文化に恵まれた地域にある学校で、地域や保護者は教育に対する関心が高く、学校教育に協力的な地域である。全学年が単学級の小規模校であり、全ての行事等に全生徒で取り組み、それらの活動を通して、生徒相互・生徒と教員間、さらには保護者や地域との信頼関係が醸成されている。生徒の家庭は3世代同居が多く、落ち着いた家庭環境の中で生活している。

とちぎっ子学習状況調査の教科に関する調査結果は、ほぼ全ての教科で県平均正答率を上回っている。また、質問紙調査結果から、生徒一人一人の生活習慣が確立しており、学習意欲も高いことが分かる。

教科担任が一人であるため、組織的な教科指導や研究が難しいという課題が見られる。

■取組の内容

1 学校質問紙から見える高い同僚性

今年度のとちぎっ子学習状況調査の「学校質問紙」では、以下の項目で「1 はい」と回答している。

- (12) 教職員間で、互いの授業を見せ合っている。
- (42) 学力向上改善プランの作成に当たっては、学力向上担当者を中心に教員間で、課題や改善策について話し合った。
- (48) 宿題の意義について教員間で共通理解している。
- (49) 宿題について評価・点検の仕方を教員間で情報交換している。

本校では、学校質問紙の結果から、同僚性を高めていることが伺える。これらの項目については、学力との相関が高いことが、調査結果の分析から分かっている。

2 校内研修の充実による授業改善・教師力の向上

本校では授業改善・教師力の向上を目指して、校内研修を始め、他の中学校と連携した指導法の研究等を実践している。

(1) 全教員による一人年1回の研究授業の実践による授業力の向上

個人で作成した指導案を学年・学習指導担当で検討する。その後、管理職と検討する。

(2) 小中・中中連携を生かした授業改善

① 小中連携

- ・小学校の教員が中学校を訪問し、終日授業や生活の様子を参観する。
- ・中学校の教員が小学校へ行き、音楽や外国語活動（6年）の授業を行う。
- ・小学校の「総合的な学習の時間」の指導計画を参照し、年間指導計画を作成する。

② 中中連携

- ・指導法の研修のために、他学区の中学校に本校の教員を派遣する。（体育・社会）

(3) 傾聴力、人権感覚を高める研修会の開催

- 外部講師を招聘し、現職教育等で研修を行う。
- ・教育長による傾聴に関する研修
- ・宇都宮大学准教授による特別支援教育に関する研修
- ・市教育委員会社会教育主事による傾聴に関する3校合同研修

(4) V・S活動

1～3年生の縦割り班（6班、8～9名）があり、1週間ごとにローテーションを組んで、年間を通しV・S活動を交互に実施する。

- V：ボランティア・・・校内清掃活動1週間、朝の活動
※ 班活動
- S：スタディ…………自分で考えた家庭学習
※ 個人活動

(5) 小規模校のよさを生かした教科指導

教科担任が1～3学年の全学年を担当する。

- ① 3年間を見通した授業
- ② 繰り返し指導、個別指導など、生徒の実態に応じた指導の充実
- ③ 生徒の情報の共有化

3 教科の壁を越えた授業研究会の推進

<研究授業・授業研究会の紹介>

2年生の理科の授業で、「日本付近における低気圧や高気圧の動きを調べる」活動を行った。本時は、数日間の天気図（デジタル画像）をタブレット上で比較し、低気圧や移動性高気圧の移動の様子から、天気の変化の規則性と偏西風とを関連付けて捉えることをねらいとしている。

学校課題の「基礎学力の定着と言語力の充実」を図るため、話し合いを通してまとめた班の考えを代表者が別の班に出向き、班員に説明・意見交換をする「特派員方式」を取り入れた。また、タブレットを活用し、数日間の天気図（デジタル画像）を画面上で重ねて、日ごとの変化を比較しやすいようにした。

授業研究会では、以下のような話し合いが授業者と参観者の間で交わされた。

(1) 他教科の学習内容に言及した発言

授業者 1週間の天気図から天気が変わっていく様子を読み取らせなかった。

教員A 話し合っていくうちに、西から東に天気が変わっていくと分かってきたね。

教員B その変化には偏西風が影響しているんだけど、生徒は偏西風について初めて学習するの？

教員A 1年生の地理で既に学んでいます。ヨーロッパは偏西風の影響で、高緯度でも暖かいとか。

教員C 1年生で学習しているんですね。

授業者 ヨーロッパの地理で偏西風を学習していたのか。社会科で学んだ知識を活用すれば違った展開にもなったかもしれないな。他の教科の学習内容を知っておくことが大切なんですね。



授業研究会の様子

(2) 自分の教科でどう使えるか考えている発言

教員A 「特派員方式」も理科と社会科以外で使えるかまだ分からないが、「特派員方式」はもつと訓練すれば、さらにできるようになると思う。やり方の説明をしていたが、「特派員方式」といえばさっと動けるようにしておけば、時間短縮にもなる。ICTと同じで、慣れていけば時間は短縮できるし、教科をまたいで訓練できればいいと思う。

教員B 「特派員方式」を使ったことがないが、自分の授業でどう使うか考えながら授業を見ていた。自分では、利点と欠点がよく分かっていない。どういう話し合いに向いているのか。国語で使えるかなと思ったら、今使える単元が思い浮かばない。どの教科でも、一つのゴールに向かって考えを進めていく単元なら有効だと思った。「特派員方式」を今後どこで使おうかということをごく考えた。

教員C 数学で特派員方式を行ったときには、関数の導入の部分で、この図を見て、どういう変化の仕方があるのかなど、お互いに情報交換をしたことがあった。

本校では、教員一人一人が、「自分の教科では、どのようなことが実践可能か」を考えて研究授業・授業研究会に臨むという高い当事者意識をもっている。

組織として同僚性が高められているため、生徒相互・生徒と教員間の「学びに向かう姿勢」が構築されている。

まとめ

- ◆ 同僚性を高めることで、教科の壁を越えて授業研究会を活性化させることができます。
- ◆ 教科間で学習内容に関する情報交換を行うことで、自分の教科の学習内容に取り入れることができます。
- ◆ 自分の教科で何をどのように活用できるか考えながら研究授業に参加することで、他教科の指導方法のよさを取り入れることができます。

II 実践事例

4 授業研究会

事例10 [中学校] 学校全体で継続して、主体的に授業研究に取り組んだ事例

■取組のポイント

- 校長のビジョンの基、全教員が主体的に学力向上に向けて、継続的に授業改善に取り組んだ。
- 校内研究会と相互授業参観を関連付けることで、全教員が課題を共有し、課題解決に向けた授業づくりに取り組んだ。

■学校の概要

本校は、市の郊外に位置する生徒数約400名、学級数15(特別支援学級2)の中規模校である。とちぎっ子学習状況調査の結果では、平成26年度、平成27年度ともに、下表のように県平均正答率と同程度もしくはそれを上回る結果が見られる。

	国語	社会	数学	理科	英語
平成26年度	—	○	○	—	○
平成27年度	—	○	○	○	○

※ ○：高い(県平均より2ポイント以上)

—：同程度(県平均より±2ポイント未満)

とちぎっ子学習状況調査(各教科)における本校の平均正答率と
県平均正答率との比較

本校は、以前から学校全体で授業研究会を継続的に実践している。このことが、高い正答率を維持している大きな要因の一つと考えられる。学習指導においては、様々な学習形態での学び合いを通してねらいを達成したり、考える力を育成したりすることを目指している。

■取組の内容

1 これまでの取組の経緯について

本校の学習指導に関する研究は、平成20年度に本格的にスタートしている。その当時、学習指導や生徒指導等で見られる課題の改善に向けて、学習指導の充実を柱にした実践的研究をすることとした。

具体的には、研究をスタートさせた頃から研究授業を年間指導計画に位置付けるとともに、外部から著名な指導者を招聘したり、内外の参観者を募ったりして活発な授業研究会を行ってきた。また、実践を通して明らかになった成果や課題については、県内外に積極的に発表してきた。

人事異動により校長や教職員の入れ替わりはあるものの、歴代のどの校長もこの実践の良さを生かして継承し、全教員が同じ方向性で学習指導の充実を図り、学校全体で学力向上に向けて授業改善に取り組んだ。この継続的な研究こそが本校の学力向上に向けた取組の要となっている。

2 今年度の研修計画と実践

(1) 校内研究会の実際

本年度の校内研究会は以下のような実施計画の基で実践している。

① 目的

生徒の学び合いを基調とした授業づくりを行い、それに適した課題、発問を検討する。

学び合いにより指導のねらいを達成させ、学習内容の定着を図る。

② 実施期日(平成27年度)

7月1日、12月2日、2月3日の計3回

③ 授業参観及び観点

子どもの学びの姿、話し合いの内容、言語活動の質的向上



④ 研究協議の内容

- ・授業者による本時の振り返り(成果と課題)
- ・本時における生徒の学びを通して気付いたこと
- ・自分の授業に取り入れたいこと
- ・自分の教科と照らし合わせて考えたこと
- ・授業者へのラブレター

(参観者から授業者へのメッセージ)

充実した研究協議にするためには、改善点をいかに取り上げていくかが重要である。本校では、生徒の実態を的確に捉え、課題を明らかにした上で、全教員で具体的な改善案を検討している。研究協議を継続して充実させるため、全教員で課題を共有し、改善に向けたよりよい情報を授業者へ提供している。

(2) 相互授業参観について

前述の校内研究会と同時期に相互授業参観を年間3週間程度実施している。全教員が授業を行い、相互に授業を参観している。授業者は授業の目標や主な学習活動などを書いた略案を準備し、参観者に配布している。

① 目的

校内研究会の目的と関連付け、全教員が授業を行い、相互に参観することを通して、学校全体の課題解決を図る。

② 実施時期（平成27年度）

第1回（6/29～7/3）、第2回（11/30～12/4）

第3回（2/1～2/5）



相互授業参観では、第1回の授業実践で得られた課題を第2回、第3回の実践につなげる工夫をしている。

また、授業を参観するに当たっては、可能な範囲で参観し合えるように、それぞれの教員が設定した個々のテーマに応じて、ポイントを絞って授業の一部を中心に参観する等の工夫をしている。

○ 学力向上担当者の声

学校全体で授業研究会を継続して取り組んできて、成果と思うことを2つ挙げたいと思います。

まず、研究協議の充実です。具体的には、教科の枠にとらわれず、お互いがそれぞれの教科の特性に応じて、活発に意見交換できるようになったことです。その背景には、授業を参観する際、それぞれの教員が発問の仕方や学び合い等について、自分の授業でどのように取り入れることができるかという共通した見方を持っていることが大きいと感じます。

2つ目は、学び合いの大切さを実感できたことです。学び合いをより深めるためには、どのような課題が適切か、どのように生徒の学習の様子を把握していくかについて、全教員で今まで以上に考えることができたと思います。

今後も、調査結果等を活用して、課題を見いだすとともに、最新の課題と関連付けて授業研究会をマンネリ化させないように工夫していきたいと思えます。

3 本校の実践から考えられる学校全体で学力向上に向けた取組を継続するポイント

(1) 自主性・自律性を大切にする

生徒の学力の向上については、学校の中心的な課題であると考え、この課題解決に向けた様々な取組を主体的に行っていくことが大切である。つまり、校長のビジョンを具体的に実践するための研修の計画、そのための組織編成、必要な予算の確保等を自分たちの中で実践し進めていくことが重要である。

(2) 学力調査等の客観的なデータを生かす

課題の設定、取組の成果の確認等において、客観的なデータを生かしていくことは学校課題の解決に向けた取組を進める上で非常に効果的である。そのため、国や県、市町が実施している学力調査のデータを学校が上手に活用していくことが大切である。

(3) 取組の成果や課題を内外に発信し、情報の共有化を図る

常に成果を分かち合い、課題を指摘していただく姿勢は、学校の取組をステップアップするためには欠かせない。

(4) 取組の評価を次年度の計画作成に生かす

これまでの取組について研究内容、組織、実施計画を生徒や教員の意識等から評価し、修正・改善をしていくことが大切である。その成果を学校全体で感じるからこそが学力向上に向けた取組を続けていく原動力になる。また、次年度の計画には、積極的に新たな取組を加えていくことも大切である。

まとめ

◆校長の明確なビジョンの基、学校の課題解決に向けて、全教員で主体的に取り組むことが大切です。

◆教員が授業研究会等の成果を感じることで、学校全体の学力向上に向けた取組が引き継がれていきます。

◆客観的な調査結果を活用することにより、学校全体の取組の成果と課題を明らかにできるとともに、次年度に向けて新たな取組を加えることができます。

Ⅲ 資料

次の①～④の資料について説明します。

① とちぎの子どもの「確かな学力」向上のために 授業改善に向けた3つの視点

本資料は、「全国学力・学習状況調査」及び「とちぎっ子学習状況調査」の結果から明らかになった課題を踏まえ、授業改善に向けた具体的な取組を提案しています。日々の授業実践を検証する際などに活用することができます。

② 平成27年度とちぎっ子学習状況調査 分析ツール

本分析ツールを使うことで、各学校の教科に関する調査の結果を一枚のシートで可視化し、強みと課題を把握しやすくすることができます。また、教科の学習に関する意識や行動と、正答率との相関が分かります。調査結果の詳細な分析などに活用することができます。

③ 関連表、パワーアップシート

- ・ 関連表は学習内容と調査問題との関連を教科書出版社ごとに示しています。
- ・ パワーアップシートは、全国学力・学習状況調査の思考力・判断力・表現力等に関わる問題を学習内容等ごとにまとめています。

関連表やパワーアップシートを活用することで、児童生徒の学習内容の定着状況を把握することができます。また、児童生徒が主体的に学習できるよう正答例に「ワンポイントアドバイス」を掲載していますので、児童生徒の家庭学習にも活用することもできます。県教育委員会ホームページからダウンロードし活用ください。

<http://www.pref.tochigi.lg.jp/m04/tochigikko.html>

④ 学力向上アドバイザーからのメッセージ

本資料は、学力向上アドバイザーが学校を訪問した際に活用した資料の一例です。学力向上アドバイザーの900回程の学校訪問を踏まえ、学力向上に成果を上げている学校の共通点を、学力向上の3つの柱の視点から7つにまとめています。学力向上改善プランの立案などに活用することができます。

平成27年度 とちぎっ子学習状況調査 分析(国語)

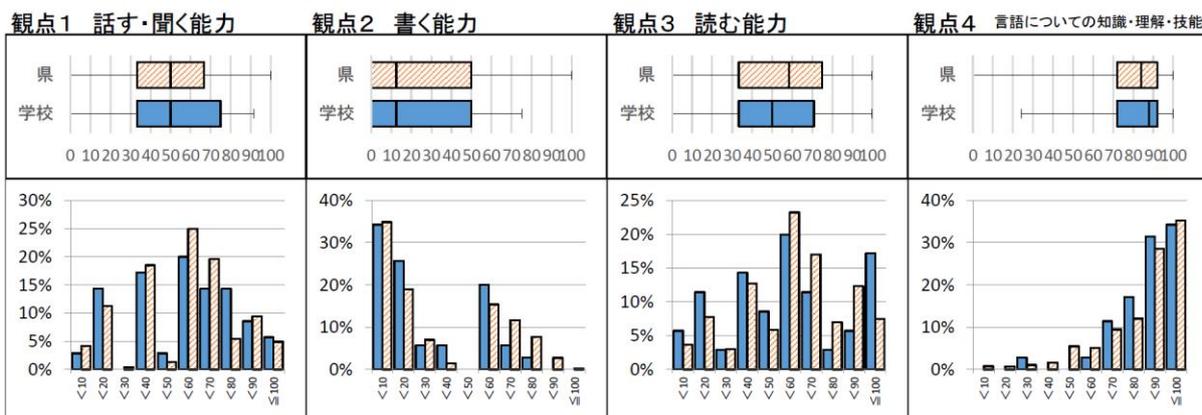
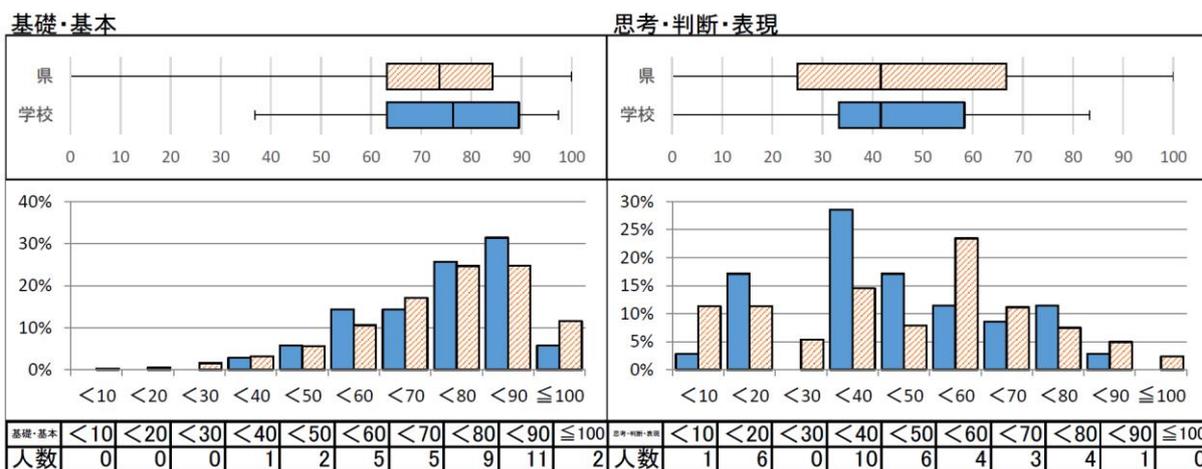
〇〇立△△小学校

5年

1. 学校の平均と県の平均

	全体	基礎	思考	観点1	観点2	観点3	観点4
県正答率	65.8	72.8	43.5	51.0	28.0	55.0	79.2
学校正答率	66.3	73.8	42.6	51.9	22.5	52.1	81.6

2. 観点別 箱ひげ図・ヒストグラム



3. 教科に関する質問 ～回答者の割合と回答ごとの平均正答率～

1:はい 2:どちらかといえば、はい 3:どちらかといえば、いいえ 4:いいえ

問題番号	65		68		72		82		92		93		
	学校	県	学校	県	学校	県	学校	県	学校	県	学校	県	
割合	1	22.9%	30.8%	62.9%	60.7%	42.9%	34.7%	91.4%	81.4%	40.0%	38.4%	22.9%	37.1%
	2	54.3%	38.6%	34.3%	30.0%	34.3%	33.6%	2.9%	13.8%	45.7%	33.1%	51.4%	40.8%
	3	14.3%	24.2%	2.9%	6.6%	8.6%	20.5%	2.9%	3.0%	11.4%	18.8%	22.9%	17.0%
	4	8.6%	6.3%	0.0%	2.5%	14.3%	11.1%	2.9%	1.8%	2.9%	9.5%	2.9%	4.9%
正答率	1	65.5	68.4	69.8	69.5	68.5	69.2	67.0	67.1	62.7	67.9	71.5	69.1
	2	66.5	64.6	61.8	62.5	63.2	66.6	48.0	61.9	69.8	66.5	64.6	65.8
	3	61.6	66.1	44.0	54.2	58.0	63.1	64.0	57.2	64.5	63.9	64.8	61.9
	4	75.3	59.0		46.5	72.4	57.4	66.0	50.5	70.0	58.3	70.0	54.7

番号	質問
65	次の教科の問題をとく時間は十分でしたか 国語
68	次の教科のじゅ業の内ようはよく分かりますか 国語
72	次の教科などの学習はすぎですか 国語
82	次の教科などの学習は、しょう来のために大切だと思いますか 国語
92	漢字の読み方や言葉の意味が分からないときは、じ書を使って調べている
93	国語のじゅ業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている

〔関連表、パワーアップシート〕

(1) 関連表

メニュー

トップページ

▼学力向上推進室

▼トップページ

- ・関連表
- ・とちぎっ子学習状況調査問題
- ・パワーアップシート
- ・レディネスシート(H28.2掲載予定)

▶全国学力・学習状況調査問題

【 第5学年 】

単元	活用できる調査問題等
1 整数と小数	
2 体積	①直方体・立方体の体積 ②容積 ③大きな体積 ④体積の求め方のくふう ⑤体積と比例 H25全国B(2)(3) H23全国B(2)(2) H26全国B(5)(2)
3 小数×小数	①小数をかける計算 ②小数のかけ算を使って
4 小数÷小数	
5 式と計算	
6 合同な図形	①合同な図形 ②合同な図形のかき方 ③三角形・四角形の角 H22全国B(2)(1)(2) H23全国B(3)(1)(2)(3) H27全国B(3)(2)
	①偶数・奇数 H21全国B(4)(2)(3) H24全国B(2)(2)
	②倍数と公倍数 H27全国B(3)(1) H26全国B(4)(2)
8 分数(1)	③約数と公約数 ①等しい分数 ②分数のたし算・ひき算 H27全国B(5)(1)(2)
9 面積	①三角形の面積 ②平行四辺形の面積 ③いろいろな三角形・四角形の面積 H19全国B(5)(1)(2)(3) H22全国B(4) H24全国B(3)(1)(2) H25全国B(3)(1)(2)(3)
	④面積と比例

(2) パワーアップシートの内容 (例：小学校第6学年 算数B 大問3(1))

パワーアップシート

小学校 算数

問題

あきさんらは、長さ24mのひもを、次のように7つに分けて、図のようにつまみ切った。

- ① 長さ2mのものを7つ作る。
- ② ①の残りのひもを3等分して、長さ8mのものを3つ作る。
- ③ ②の残りのひもを4等分して、長さ3mのものを4つ作る。
- ④ 残りのひもを切る。

また、図のようにつまみ切った。

あきさん m
たかしさん m

正答例

小学校 算数

問題

あきさんらは、長さ24mのひもを、次のように7つに分けて、図のようにつまみ切った。

- ① 長さ2mのものを7つ作る。
- ② ①の残りのひもを3等分して、長さ8mのものを3つ作る。
- ③ ②の残りのひもを4等分して、長さ3mのものを4つ作る。
- ④ 残りのひもを切る。

また、図のようにつまみ切った。

あきさん 8m
たかしさん 16m

【ワンポイントアドバイス】
正答例は、3つの辺の長さが等しい正三角形。まわりの長さが24mなので、1つの辺の長さは24÷3=8(m)。あきさんは8m、たかしさんは8+8=16(m)のところを指せばよい。

教師用資料 (設問別調査結果)

設問別調査結果

設問番号	設問内容	正答率(%)		無解答率(%)	
		栃木	全国(公立)	栃木	全国(公立)
3 (1)	あきさんが24mのひもを、次のように7つに分けて、図のようにつまみ切った。	33.3	30.6	6.0	6.9
3 (2)	また、図のようにつまみ切った。	45.3	46.3	19.6	19.9

正答率・無解答率
栃木・全国(公立)

設問別(解答類型)調査結果

設問番号	設問内容	解答類型									
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
3 (1)	あきさんが24mのひもを、次のように7つに分けて、図のようにつまみ切った。	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3 (2)	また、図のようにつまみ切った。	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

解答類型
栃木・全国(公立)

※ 平成 27 年度全国学力・学習状況調査報告書 (国立教育政策研究所 平成 27 年 8 月)

〔パワーアップシートへのアクセス方法〕

ホーム>教育・文化>学校教育>学習指導・学力向上>学力向上について【学力向上推進室】

学力向上アドバイザーからのメッセージ

県教育委員会では、平成26年度から、とちぎっ子学習状況調査の効果的な活用や、学習指導に関わる検証改善サイクルを確実に構築・運用するために、10名の学力向上アドバイザーを県内公立小・中学校に派遣しています。学力向上アドバイザーの900回程の学校訪問を通して、組織的に学力向上に取り組み、成果を上げている学校には、共通点があることが分かりました。そこで、それらの共通点を、学力向上の3つの柱に基づいて、以下のとおりまとめました。各学校の学力向上の取組の参考にしてください。

子どもの学ぶ意欲、学習習慣

1 主体的に学ぶ子どもを育てるために、授業のねらいを効果的に示し、授業のまとめや振り返りをさせましょう。

- ・「学業指導の充実 ～子どもが意欲的に取り組む授業づくりを通して～」(H26.3 栃木県総合教育センター)
- ・「学ぶ意欲をはぐくむ -『学習に関するアンケート』を活用して-」(H23.3 栃木県総合教育センター)

2 授業のねらいを達成させるために、自分の考えをまとめる活動と説明や話し合い活動を相互に関連づけましょう。

- ・「思考力・判断力・表現力を育む授業づくり【理論編】-『思考のすべ』と発問の工夫-」(H27.3 栃木県総合教育センター)
- ・「平成26年度とちぎの子どもの学力向上を図る授業改善例[小学校][中学校]」(H26.11 栃木県教育委員会)

3 子どものよさを認め、言葉かけを工夫することで子どもに自信をつけさせましょう。

- ・「学業指導の充実に向けて-学業指導を全ての教職員が進めるために-」(H24.3 栃木県教育委員会)

教師の指導力

4 学力向上に向けた明確な目標（ビジョン）を全教職員で共有し、組織的に取り組んでいきましょう。

- ・「栃木の『学校力』の向上」(H25.3 栃木県総合教育センター)
- ・「『学校力』・『教師力』を高めよう」(H19.2 栃木県教育委員会)
- ・「平成26年度学力向上実践事例集 -検証改善サイクルの確実な運用を目指して-」(H27.3 栃木県教育委員会)

5 授業研究会等を通して、学び続ける教師集団を作りましょう。

- ・「組織力の向上を図る校内研修の充実」(H22.11 栃木県総合教育センター)
- ・「平成26年度学力向上実践事例集 -検証改善サイクルの確実な運用を目指して-」(H27.3 栃木県教育委員会)

6 学習ルールを徹底し、互いに認め励まし合える学級集団を作りましょう。

- ・「学業指導の充実に向けて-学業指導を全ての教職員が進めるために-」(H24.3 栃木県教育委員会)
- ・「学級経営のイ・ロ・ハ」(H27.3 栃木県総合教育センター)

保護者の理解・協力

7 保護者の理解・協力を得るために、学校の取組を積極的に発信しましょう。

- ・「平成26年度学力向上実践事例集 -検証改善サイクルの確実な運用を目指して-」(H27.3 栃木県教育委員会)

平成27年度学力向上アドバイザー

渡邊 清

川村 滋

綱川 浄恵

戸田 信之

岡村 静幸

渡邊 久芳

新村 純一

青木 勇樹

小堀 良一

星 成雄

平成27年度学力向上アドバイザー派遣事業

学力向上実践事例集

-授業改善を目指して-

発行 平成28年3月

栃木県教育委員会事務局学校教育課 学力向上推進室

〒320-8501 栃木県宇都宮市塙田 1-1-20

TEL : 028-623-3367 FAX : 028-623-3361